

静岡薬学友會報

静岡県立大学薬学部同窓会報
2021年（令和3年）No.89

特集 今、改めて考える薬学の役割



会員専用Webサービスご利用の手引き

http://shizuyaku.jp

静薬学友会

検索



スマートフォンからも
ご利用いただけます。



Web名簿システム ログイン

画面右上の**マイページ**をクリックしてください。「会員ID/パスワード」を入力後、ログインをクリックしてください。

初回ログイン時には、メールアドレスと生年月日の登録が必要になります。

* ご自身のID/パスワードを確実に保管していただきますようお願いいたします。



パスワードを 忘れた方

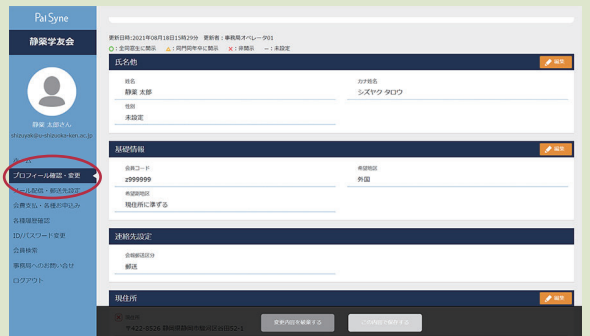
万一、変更したパスワードを忘れてしまった場合は、画面の**パスワードを忘れた方**より、登録済のメールアドレスと生年月日で即時に再発行を受けることができます。

一度もログインしたことがない方で、パスワードがお分かりにならない場合は、事務局にお問い合わせください。パスワードを再発行いたします。



ご自身の登録情報の 確認と変更

- 住所、勤務先などの情報はご自身でご変更いただけますようお願いいたします。
- 登録情報を会員にどの程度公開して良いか、ご自分で設定してください。「全同窓生に開示」「同門同年卒に開示」「非開示」の設定ができます。



会費のお支払い 各種お申し込み

- 年会費、終身会費、10年会費のお支払いができます。
- 薬学生涯研修講座のお申し込みができます。(お申し込み期間中のみ表示されます。)



同窓会名簿の 閲覧

卒業・修了年、氏名、住所、勤務先等を検索し、本人が公開を許可した情報を閲覧できます。



静薬学友会報

2021 No.89

目次

静薬学友会会長挨拶	安倍道治	2
特集『今、改めて考える薬学の役割』		
これからの企業における創薬研究と薬学	仁尾泰徳	3
新型コロナウイルス拡大に伴った薬局薬剤師の役割の変化	長田正章	4
新型コロナウイルス感染症対策における薬学の役割を踏まえ、 薬学とは何かという原点に立ち返る	野坂佳伸	5
病院における薬剤師の役割-調剤をしない薬剤師-	神山晋太郎	6
地区同窓会だより		
関東/静岡県/北海道/九州・沖縄		7
大学だより		
薬学部長就任挨拶	賀川義之	10
新任教授	内田信也	11
	竹内英之	12
	原雄二	13
新任挨拶	村上央	14
退職に際して	山田幸平	14
	鈴木隆	15
	武田厚司	16
	並木徳之	17
研究室だより	生化学	18
	薬理学	19
	身体運動科学	20
	医薬品製造化学	21
	衛生分子毒性学	18
	医薬生命化学	19
	生体機能分子分析学	20
	生薬学	21

創剤科学	22
生体情報分子解析学	23
臨床薬効解析学	24
実践薬学	25
生命物理化学	26
統合生理学	27
創薬探索センター	28
薬学キャリアデザイン近藤寄附講座	29
薬学部教員の人事異動	29
科学英語	30
新型コロナワクチンの職域接種への薬学部教員の協力	31
令和2年度成績優秀者賞・岩崎賞受賞	
石口晃平	32
龍聡平	32
齋藤鉄三郎	33
鈴木ひかる	33
熊谷拓也	34
山田遥香	34
山岸亮平	35
第3回静岡県立大学内西いよ子奨学金授与式	35
中野真汎先生を偲んで	36
富田多嘉子先生のご逝去を悼んで	37
薬学部教室名および教員一覧	38
本部だより	
理事会報告・総会報告	39
会計報告	43
静薬学友会代議員・役員一覧	45
山田浩先生最終講義のご案内	46
令和3年度薬学生涯研修講座	46
中国地区同窓会総会オンライン開催のご案内	47
編集後記	48
訃報	48
正会員の皆様へ 会費納入のお願い	49
令和2年度会費納入者一覧	50
会員専用Webサービスご利用の手引き	

ある夏の日の昼下がりに

今年の夏はいつの間にか終わっていた感じが強い。8月の後半は雨が続き、コロナ禍で行動を制限している中で帰省もままならず、夏を感じることが少なかったせいでろうか。オンライン講義が主に行われているため、授業期間にもキャンパスの賑わいはなく、夏休みになっても人の数の変化が少なかったことも、今年の夏の印象に影響を与えているかも知れない。

昨年の会報で、次の発行では新型コロナが過去のこととなっていることを願っていたが、そうはなっていない。

ある本に新型コロナ対策分科会の尾身茂会長の感染症学会の基調講演での一節があった。

「ウイルスという相手が攻め込んでくるのに対し、その相手の動きを見ながら何とか凌いできた」

リスクゼロを目指すような、常時緊張を強いられる試みは長くはつづけられないとして、こう語った。

「剣道では相手をコントロールして動かして抑える、『後の先』といった言い回しがあります」

〔分水嶺〕河合香織、岩波書店

『後の先』相手に打たせて、その先で勝つ。
なるほど、変化していくウイルスや社会情勢に対して、その変化に併せて、対策をも変化させていく。

コロナ禍が一段落した未来の社会は、きつと元の姿ではない。状況に合わせて変化させ、その変化を日常にうまく取り入れていく。何となく、自然と対峙するのではなく、うまくつきあってきた日本人の姿そのもののような気がする。その変化についていくだけでも大変な自分があるわけだが。

ふと見上げると、そこにはいつもの夏と変わらない蒼空があった。

撮影地 静岡県立大学薬学部棟4階バルコニー
撮影者 伊藤由彦(平成14年卒)

静薬学友会会長挨拶



一般社団法人静薬学友会 会長 静岡県立大学客員教授 安倍道治
(昭和46年卒)

早いもので、代表就任後1年が経ちました。会員各位におかれましては、日頃より、静薬学友会の活動にご理解とご支援をいただき、役員を代表してお礼申し上げます。

会員の皆様方におかれましては、昨年春に武漢で確認された新型コロナウイルスによるパンデミックの発生に伴い、リモートワークや自粛生活を余儀なくされ、食生活の乱れや運動不足と相まって何かとストレスのたまる毎日を送られていることと思います。

私も静薬学友会の活動におきましても、新型コロナウイルスの影響を受け、1年半以上にわたって、一堂に会する対面での会合は控えざるを得ない状況が続いており、このため、理事会、社員総会は、新たに、ZOOMを利用したりリモート会合により開催しております。また、この4月には、主として関東地区在住のOB、OGの協力を得て、学生に対する就職説明会（進路相談を含む）もリモートで開催しました。

また、地区同窓会におきましても、本部同様、活動が制限されていますので、本部で始めたZOOMシステムを無償で地区同窓会の活動にも生かして

いただくことにより、今後、少しでも活動が促進されることを期待しております。

このように、静薬学友会の活動は、コロナ禍の収束の目的が立つまでは、ZOOMによるリモート会合を主体とした活動となりますが、一堂に会する手間は省けるというZOOMの利点は理解できるものの、対面による会合と比較して、人と人との触れ合いなど、やや臨場感に欠ける点が気になります。したがって、今後、ワクチン接種により集団免疫を獲得し、自粛生活が解除された場合には、必要な会議については、以前のような対面による活動に戻りたいと考えています。

ところで、静薬学友会は、創立百周年を機に、2018年春に、一般社団法人となり、これまでの親睦を旨とした同窓会から、社会との関わりの明確化、組織としての透明性の確保、コンプライアンスの順守等の強化を図ったところ です。

法人化後、既に3年が経ちましたが、その間、まずは、学生の将来の職業選択に対する早期意識付けを行うため、

県立大学薬学部に寄附講座を開設し、各界で活躍する先輩諸氏を講師として招聘し、臨場感のある講義を開始しました。

他方、静薬学友会としましては、これまで抱えてきた未解決の課題、すなわち、一つは、地域医療に貢献できる法人に進化することであり、もう一つは、静薬学友会自身の運営の安定化の課題であります。これらの課題については、有識者のご意見もいただきながら、関係者で2年近くにわたり、検討を重ねてきました。

その結果、静薬学友会とは別に、有志により新たに株式会社としての運営管理会社を設立する、静薬学友会は運営管理会社と協同して、地域医療の向上や人材育成に貢献する、静薬学友会は、運営管理会社に対し株主として参画し、毎年、配当金のほか収益の一部を寄付金として受け取ることにし、運営の安定化を図る、という趣旨の提案を取りまとめました。

本提案は、新設する運営管理会社の定款案とともに、今年の5月開催の理事会及び6月開催の社員総会に上程さ

れ、承認をいただいた後、7月15日に登記が完了し、発足する運びとなりました。

運営管理会社においては、今後、定款に沿い、具体的な事業の検討が進められることとされていますので、今後の活動状況につきましては、後日、機会を見つけて紹介をさせていただきますと思います。

このような形で、本学薬学部の卒業生有志が、新たに起業することは他大薬学部においても、あまり例がないものと思います。加えて、コロナ禍の収束が未だ見えない状況の中で、船出となりますので、協同して事業を担う学友会としても極めてチャレンジングな仕事となるのが想定されます。

しかしながら、静薬学友会執行部としましては、同窓会の活動にとどまらず、地域医療に貢献しうる組織に変容する強い覚悟の下、一丸となつて新規事業に取り組む所存でございますので、会員各位におかれましては、なお一層のご理解とご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

特集 今、改めて考える薬学の役割

これからの企業における創薬研究と薬学 (新型コロナウイルス研究概要を含む)



武田薬品工業

T-CiRA Discovery, Organoid Medicine Project

主席研究員 Co-PI

仁尾 泰 徳

(平成12年卒)

私は平成12年に静岡県立大学薬学部(生化学教室所属)を卒業し、京都大学薬学研究科(腫瘍ウイルス薬品学)を経て武田薬品工業に入社後20年目の節目を迎えています。現在は、武田と京都大学CiRAの共同研究組織「T-CiRA」の肝臓部門を共同研究者である東京医科歯科大学武部貴則教授と共に率いています。T-CiRAにおいてはPS細胞を用いて肝再生治療や薬剤性肝障害、肝線維症、肝臓から分泌される凝固・補体因子に関連する血友病や補体疾患等の薬理研究をしています。これまでに補体活性化に対して長期抑制作用がある抗補体因子抗体を見出し、CIRA所長山中伸弥先生と協議して抗

補体抗体を用いた新型コロナウイルス研究を遂行することとなりました。新型コロナウイルス感染における血栓症は補体が活性化して起こる微小血管障害に分類されることが報告されており、日本医療研究開発機構(AMED)の資金援助を研究代表者として受けながら新型コロナウイルス感染後の重症化症状改善研究を実施しています。薬効検証には新型コロナウイルス感染サルにおける抗補体抗体の新型コロナウイルス病態改善効果とT_H1細胞を用いた血管三次元オルガノイドの感染実験を実施してin vitroにおける血管障害に対する当該抗体の効果を検証し、AMED報告会の一部を報告していま

す(AMEDHP参照、全容は投稿準備中)。結果として補体抗体投与群において新型コロナウイルス感染後の体温上昇の抑制やサイトカイン・血栓の抑制傾向を確認しました。ここからはこれからの創薬と薬学について考察しますが、企業における創薬研究は研究戦略が変わると専門とは異なる研究分野にもアサインされることがあり、研究多様性への適応が要求されます。薬学部は物理・化学・生物・薬剤、薬理学、臨床薬学の知識を持つことで他学部出身者に比べて広い基礎知識があり、多様な疾患・病態研究の適応能力が高いように思われます。しかし今回のコロナ禍ではこれまで承認されてこなかったmRNA製剤が迅速承認されるなどイノベーションも生まれています。A I創薬やナノテクノロジーを用いたの薬剤デリバリー、中分子薬剤などの技術革新も生まれており、これまでの低分子薬剤中心の薬学教育だけでは不足かもしれません。創薬研究や新規薬剤は今後抗体製剤や遺伝子治療、細胞治療など多様性に富むことが予想され、薬剤師はこれらの変化に対応する必要があるとともに創薬研究者を目指す

方々では信頼できる実験手技はもちろんのこと、多様なモダリティを常にと頭の中に入れて一分野にこだわることなく、医用工学やオミックス、バイオインフォマティクスの変化に対応できる人が重宝される時代がすでに来ているように思います。私自身様々な疾患分野や新型コロナウイルスなどの研究領域への変化を要求されており、今は細胞治療という大きくこれまでの私自身の研究経験とは異なる研究を主導する立場に就いています。企業研究者としてこのような研究ニーズの変化に対応しながら「一隅を照らす」ような仕事をして参りたいと考えています。最後になりましたが新型コロナウイルス感染症に対してワクチン接種がいきなり、オーストラリアで実施されたウサギを駆逐するために散布したウサギ粘液腫ウイルスの弱毒化例のように新型コロナウイルスも弱毒化してやがて風邪と同等になるという予想に期待しながらも、重症化抑制研究についても成果を公表して社会貢献できればと考えています。このたびは、このような執筆の機会をいただきありがとうございました。



新型コロナウイルス拡大に伴った薬局薬剤師の役割の変化

木の下町薬局管理薬剤師 清水薬剤師会副会長 長田 正章

(平成19年卒)

現在新型コロナウイルスデルタ株が猛威をふるっておりますが、このウイルスが出現した当初から今まで、薬局薬剤師としての役割、やらなければならぬ事は刻々と変化しました。初めて新型コロナウイルスが日本で確認された際は、まずコロナウイルスについて知ることが重要でした。私の薬局にいらっしゃる患者様は、感染症や衛生薬学に関する知識に乏しい方がほとんどでしたので、まずは不安を取り除くことが最も重要な仕事だと感じていました。そのために、我々が確かな情報を得て、患者様を過度に不安にさせることのないようにそれを届けることに努めました。次第に様々な知見や情報が多方面から集まって来るようになり、感染経路は飛沫感染が主であり、その対策としてマスクの着用、手指のアルコール消毒が重要であることが認知されると、薬局としてはマスクやアルコール類を入荷し、患者様に提供することが、一番の課題となってきました。同時に患者様の感染対策に関する相談や発熱時の対処法を求められる機

会が増えるにつれて、ウイルスがすぐそばまで迫ってきていることを実感しました。都市部において「医療崩壊の危機」が叫ばれつつあった中、新型コロナウイルスワクチンの誕生により光が差し込みます。このファイザー社のコミナティというそのワクチンが、我々薬剤師の役割をさらに大きく変えていきます。海外にてワクチン接種が進む中、日本では2021年2月17日からワクチン接種が始まりました。ワクチン接種が徐々に進むにつれて、期待と不安を併せ持った患者様たちからはいつになったら打てるのか、副反応は怖くないのかという質問や疑問が多く寄せられるようになります。ワクチンの輸入が必要に追いついていない当時の段階では、誰が、いつ、どこで、打てるのかは全くわからない状態でした。そんな中、我々清水薬剤師会に新型コロナウイルスワクチンの希釈分注作業を集団接種会場にて、薬剤師に行ってもらいたいという市からの依頼が入ります。コミナティは、生理食塩水で希釈した後、静岡市では6本に分

注し、接種することができます。実は当時、現場の薬剤師はもう何年も注射シリンジを触っていないという者がほとんどで、そんな私たちにできるのだろうかという不安が大きく、驚いたのが正直なところでした。しかし、現場で人手に困っている医療従事者や、近くにいらっしゃる患者様、さらに地域の皆さまの一助になれるならばと、清水薬剤師会としてお受けしました。そこからは、県薬剤師会での研修に向き、病院薬剤師の方から希釈分注作業を学び、それを持ち帰って研鑽を繰り返して、今度は私が研修会を開催して会員の皆さんに教え学んでもらい、これまでなかった役割を担ってくださる会員を募集しました。現在清水区では、4か所の接種会場にて約100名の薬剤師が希釈分注作業に従事しています。医師、看護師、スタッフと協力して、ワクチンを地域の皆様に接種できることについては感慨深いものがあります。始めは薬剤師の役割の変化に戸惑いがあったものの、ワクチンを打ち終え、喜んで帰っていく方たちに「ありがとう」

と言われたときは、前に踏み出してよかったなと感じます。今回のようにスピードを伴った変化に薬局薬剤師として対応できたことで薬剤師のポテンシャルを証明できたと感じています。今後様々な検証は必須です。ワクチンの安全性や感染症対策の有用性などを評価する上で、薬局薬剤師に出来る新たな役割はないかと考えています。



希釈分注作業の様子 (筆者)



新型コロナウイルス感染症対策における薬学の役割を踏まえ、 薬学とは何かという原点に立ち返る

厚生労働省医薬・生活衛生局 医薬品審査管理課 課長補佐

(内閣官房・健康・医療戦略室併任) 野坂佳伸

(平成15年卒)

医療、公衆衛生上の危機に収まらず、経済的、更には雇用を始めとする国民生活にまで大きな影響を及ぼしている新型コロナウイルス感染症は依然、収束の気配は見えない。

インフルエンザウイルスに対するノイラムニダーゼ阻害薬のような特効薬に相当するものは現在のところ開発途上であるが、ワクチンを始めとする医薬品の供給がこの状況を打開する上で極めて重要であると考えられる。無論、医薬品の開発の上で薬学の役割は非常に大きなウエイトを占め、責任もそれ相応のものである、と言えよう。

医薬品の開発は究極的なものではないが、対処療法薬の調剤、診断方法(P・C・R検査、抗原検査(定量/定性))の研究開発をする上でも薬学の存在は極めて重要でこのような業務に従事、活躍されるOG/OBの方々も少なからずいらっしゃるであろう。

一方で薬学とは何か、この点に確固たる理解や持論がなければ、新型コロナウイルス感染症を始め、今後の感染症対策における薬学の活路を見いだす

ことはいささか困難であると考えている。

無論、薬剤学や製剤学など薬学部にはあるが、私の考えでは薬学とは他の工学、理学、経済学、法学、政治学などと比べて一言で表し難い学問であり、薬学とは何か、どのようなものかと100人に問えば100通りの回答があるものと考えている。

物理的な分野に従事する者であれば量子力学やレオロジーのことを述べらるだろうし、化学的な分野に従事する者であれば有機化学や合成のことを述べらるだろうし、生物学的な分野に従事する者であれば微生物学や生理学のことを述べるであろう。

薬学とは何かと万人がうなずく回答は依然、持ち合わせていないものの物理、化学及び生物の分野に属する学問をきめ細かく体系立って学ぶ学問は薬学の他にないということは誰しも疑問を持たない事実であり、薬学人のほとんどは物理、化学または生物のいずれかの分野に属する学問を理解する上で、

違う分野に属する学問の知識によって、より広い視点で理解できた経験がしばしばあるだろう。例えば量子力学の知識によって化学反応のメカニズムをより正しく理解すること、イオンチャンネルの働きを理解する上で電位学の知識が思わぬ役に立つことなど、枚挙にいとまがないと言えよう。

このことから、基礎科学レベルでの知識・技術を応用科学の水準に昇華させる可能性が高い学問であるということも言って差し支えないものと考えられる。

更に述べると、就職後、必ずしも、教科書や論文に掲載されるような知識を日常的に要する場面はそれほど多くないであろうが、知識の応用力、物事の正確な理解をする上で、薬学で培った経験は非常に大きな役割を果たしている。と少なくとも私の経験・業務上は断言できる。特に、自身のコロナ対策に関する業務においては、治療薬の薬理学的作用メカニズム、検査手法のことを正確に理解し、幹部を含めた周囲に分かりやすく説明することは薬学の人間にしかできないことであったと改

めて痛感した。

また、コロナウイルス対策ではないが、課長補佐の駆け出し時の若かりし頃、新型インフルエンザ等対策特別措置法の法案作成チームに属し、以下の閣議決定まで要した感染症対策の文書を作成した際も、様々な事象を正確に理解し、平易な日本語で記載することを経験したが、右に述べた薬学の利点が最大限活かされたことはとても感慨深い。

<https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/fu/kettei/130607keikaku.pdf>

この寄稿文を読まれている方々は目の前の課題、業務に専念されていることとは思量するが、自分なりの「薬学」に関する理解、信念を確固たるものとされた上、薬学の英知を駆使すべく直接的な成果に縛られることなく、目の前の業務・事象のその先にある薬学のフィールドを念頭に手を取り合えば、この困難は容易とは言わないまでもいつか克服できると信じている。



病院における薬剤師の役割 — 調剤をしない薬剤師 —

静岡県立静岡がんセンター

臨床研究支援センター | 臨床研究管理・調整室 主査 神山 晋太郎

(平成19年卒)

私は静岡県立大学大学院を修了し、平成21年から静岡県の行政薬剤師として働いています。在学時代は、薬品製造工学（現 創剤科学）研究室に在籍し、粉まみれになりながら研究に励んでいたことを今でもよく覚えてます。さて、皆さんは行政薬剤師と聞いて、どんな仕事をイメージしますか。最近の新型コロナウイルス禍においては、県のワクチン調達や病床確保等でも行政薬剤師が活躍しているんですよ。行政薬剤師の活躍については、私の先輩である田中喜久夫様が2018年10月1日発行の本誌86号に詳しい内容を寄稿しておりますので、ぜひそちらをご覧ください。

私は現在、静岡県の行政薬剤師の勤務先の1つである静岡県立静岡がんセンターに勤務しています。ここで私は、皆さんがイメージするような調剤や服薬指導を行っているわけではなく、医師等の研究者が臨床研究を計画、実施

していく上で必要な支援を行っています。医薬品に関する研究を始め、医療機器や内視鏡治療、放射線治療など、医療に係る様々な研究の相談があるため、幅広い分野の知識が求められ、勉強の毎日です。また、自らも研究の実施に関わっています。例えば、静岡がんセンターでは、「支持療法」を積極的に実践しており、その一環として、分子標的抗がん剤の副作用対策のための外用剤研究を立案しました。主薬となる成分の探索から製剤化の検討、病院に併設された研究所における動物実験等を経て、薬剤部で院内製剤として試験薬を完成させ、内科医や皮膚科医と相談して研究計画を策定し、抗がん剤の副作用治療薬としての開発を目指し、臨床研究をスタートさせました。

また、静岡がんセンターでは、腫瘍の摘出手術を受けた全がん種の患者さんを対象としたゲノム解析研究「プロジェクトHOPE」を実施しています。プロジェクトにより集めた日本人固形がんの遺伝子等解析データを創薬・診断薬開発につなげるべく、企業等への情報提供と創薬への活用を推進しています。本取組みにおいて、私は企業等との調整窓口及び知的財産の維持管理について担当し、秘密保持契約や共同研究契約の締結に向けた相手方との契約内容のすり合わせや提供するデータの内容等に関する調整を行っています。なお、プロジェクトHOPEの成果は、患者さんへの還元の一環として、解析データの一部を日本語のデータベース「TCGA (Japanese version of the Cancer Genome Atlas: 日本版がんゲノムアトラス)」(<https://www.jcga-cc.jp/>)として公開し、2019年より保険診療のもと開始された「がん遺伝子パネル検査」に活かしてもらおう取り組みを行っていますので、ぜひご覧ください。

このように、病院勤務といっても、調剤だけでなく、臨床研究支援や産学連携、知的財産管理など、様々な活躍の場があることがお分かりいただけると思います。県庁や保健所等での行政薬剤師としての業務にも視野を広げると、更に多くの社会的役割を果たしています。私は、薬剤師の強みは、薬学はもちろん、薬学の基礎となる幅広い科学の知識だと考えています。そしてそれを活かし、必要に応じて契約事務や知的財産管理などの知識・経験を積むことにより、さらに活躍の幅が広がり、多くの場面で活躍できる存在になると感じています。

近年はスマホ1つでなんでも調べられる時代になりました。特に在学中の皆さんにおかれては、薬剤師が世の中のどのような役割を担っているか、改めて調べてみると面白いかもしれません。その時に、「静岡県の行政薬剤師」に少しでも興味を持っていただけると幸いです。

地区同窓会だより

関東地区 薬学系就職説明会を支援

地区同窓会代表 **本島 玲子**

(昭和58年卒)

積極的に声掛けしていただいたおかげで最終的には本部を含めて18名体制になりました。うち10名は県大の就職説明会には初参加でした。

過去1年間で、ユーザーとしてZoom等リモートアプリを使用したことがある人は増えましたが、学友会の協力者の中で、主催者として運営を経験した人はいませんでした。大学が持つZoomアカウント(複数)のブースを設けられる会議場を想像してください)のうち3つは、少なくとも「①病院」「②薬局」「③製薬関連企業、官公庁、その他」に用い、その中でブレイクアウトルーム(企業・施設等のブースに相当、以下ルーム)に割り当てるとのことでした。そこで、学友会のOB・OGを職域ごとに①②③に分

散させて配置するか、学友会として別途1つのアカウントを使うか検討しました。ルームを出入りする学生やホス

トの画面でどう見えるか、学友会の協力者どうして夜な夜な試行した結果、思い切って「学友会アカウント」を設けてもらうことにしました。また、学友会の役割は、「OB・OGの立場で相談にのること」と再確認して臨みました。

【開催まで】今年3月半ばに学友会經由で開催の案内を受けた際は、これまで参加実績がある方々にお声がけすればよいと考えていました。しかし、3月末になって具体的な実施方法を詰める中で、学友会としてもう少し積極的に関東地区幹事に再度相談しました。そこからの動きは素早く、同期・同僚に

【開催当日】学友会アカウントでは、ルームを「行政・PMDA」「SMO」

「製薬」「病院」「薬局」に大別、「製薬」はさらに研究開発、生産・品質保証、MR・営業、企画・薬事、安全監視、事業開発他に分けてOB・OGが待機しました。案内役がメインセッション(受付)に常駐し、訪問してくる学生に興味のある職域や疑問を尋ね、最適と思うルームへの移動を促す形にしました。そして、2時間の間に41名の学生が訪れてくれました。

【今後に向けて】大学、学友会、関東地区同窓会のいづれにとっても初めての試みだったため、開催後、協力者にアンケートを行いました。その結果、「学生のニーズ」については「大卒の情報・より具体的な情報など、学年やニーズが異なる学生への対応が必要」「進路が未確定の学生には学友会のような相談形式が適する」などの意見がありました。一方、「製薬」は細分化し過ぎて、予備知識のない学生にはわかりにくかったかもしれないという反省も聞かれました。

「今後の就職説明会の開催方法や学友会の関わり方」については、「OB・OGと話すことで企業・施設等の雰囲気を知る機会になるとよい」「全国の地区同窓会に協力を呼びかけるとよい」「関心の高いテーマはベテラン・中堅・若手をチームに

できるとよい」など前向きな提案がありました。

リモートアプリが身近になり、今後は地区を超えたイベント開催が可能と思います。最後に、ご多忙の中、協力していただいた皆さまに心より御礼申し上げます。

静岡県立大学 薬学系就職説明会2021 学友会アカウント協力者 (順不同)

安倍 道治	元厚生労働省、元中外製薬	高橋 千恵子	有限会社わかさ調剤薬局
海老原 毅	横浜療育医療センター 薬剤課	多田 義孝	株式会社大塚製薬工場 業務部
大家 毅	杏林製薬株式会社 キョーリン企業年金基金	辻 智史	株式会社ツジコーポレーション ペンギン薬局
加藤 彩香	独立行政法人医薬品医療機器総合機構 (PMDA)再生医療製品等審査部	仲谷 博明	自営業(コンサルタント)
木下 俊也	静岡県立大学客員教授	花田 真隆	杏林製薬株式会社 わたらせ創薬センター CMC研究所
越田 晃	東京都リハビリテーション病院 診療部 薬剤検査科	松浦 大輔	株式会社バスクリン 製品開発部
近藤 晶子	中外製薬株式会社 事業開発部	松原 久雄	シミツクホールディングス株式会社 CEO office
佐藤 泰士	ユーシービージャパン株式会社 開発本部 薬事部	本島 久也	一般社団法人医療機器レギュラトリー サイエンス財団 JMO事業部
進藤 大地	大正製薬株式会社 品質保証部	本島 玲子	医薬経済オンライン ライター

静岡県地区

新型コロナウイルスワクチン接種に係る静岡県内の薬剤師の活動について

地区同窓会代表 杉井邦好

(昭和55年卒)

新型コロナウイルス感染症対策の切り札となるワクチン接種は2月17日に100の医療機関の医療従事者およそ4万人を対象にワクチンの先行接種が開始され、4月からは高齢者への接種が開始されました。

新型コロナウイルス感染症のワクチン接種を推進するため、薬剤師には予診のサポート（問診、予診票の確認（記入の補助を含む）、薬剤服用（使用）歴の確認や副反応等に関する事前の説明）、ワクチンの希釈・シリンジへの充填、接種後の状態観察など、平時から薬剤師が行っている服薬指導等の患者対応の経験・知識を活かして予診のサポートを行うことなどの役割が期待されています。

新型コロナウイルスワクチン接種に係る静岡県内の薬剤師の活動については、磐田市からワクチン接種への協力を求められた磐田薬剤師会が県内で最も早い3月3日、4日にワクチンの希釈及びシリンジへの充填の技術を学ぶ研修会を開催したところテレビニュースや新聞で大きく取り上げられ、県内市町から各地域薬剤師会への協力依頼が急速に進んだと感じています。

また、県薬剤師会では3月21日に各地域薬剤師会の新型コロナウイルスワクチン担当者を集め市町から協力依頼があった場合に備え、各地域で研修会が開催できるようワクチンの希釈及びシリンジへの充填の実技を含めた会議を開催するとともに研修会に使用する模擬バイアルの斡旋や模擬バイアル製作用器具の貸し出しなどを行いました。

5月末現在で各市町から地域薬剤師会への協力依頼内容は予診のサポート、ワクチンの希釈・シリンジへの充填、接種後の状態観察、診療所などへの配送のセッティングなど様々ですが、県内35市町のうち24市町で15地域薬剤師会が新型コロナウイルス感染症のワクチン接種に協力しています。

5月には薬剤師によるワクチン接種についての議論が浮上し、結局は見送

りとなりましたがワクチン接種に関する知識の取得や薬剤師によるワクチン接種が可能となった場合に備えて研修を行う必要があるとの声もあることから、ワクチン接種研修について静岡県立大学薬学部と協議しているところで

す。

結びに、コロナ禍を乗り越え平穏な生活を取り戻すため、接種会場の裏側で薬剤師が活躍していることを頼もしく感じています。



静岡市の大規模接種会場でワクチンの希釈・充填作業を行う河西きよみさん
(平成6年学部卒)



県薬のワクチン担当者会議で希釈・充填の実技指導を行う原田晴司さん
(右側：昭和63年修士修了)

北海道地区

いつまで続くのコロナ

地区同窓会代表 **水島 教之**

(昭和54年卒)

静薬学友会会員の皆様には、コロナに負けず活動をされていると思います。

また平素は支部運営にご協力ありがとうございます。北海道地区においても札幌市にまん延防止等重点措置が出されていますので、地区会員と会うこともできず、もどかしい日々を過ごしています。

今回もコロナ禍における日常を書きます。

岩見沢市から4月、薬剤師会にコロナワクチンの希釈、分注の依頼がありました。土曜、日曜であれば問題は無いのですが、平日の午後ということになかなか人が集まらず、支部長（久美奥さん）もたいへん苦勞をしています。しかしワクチン会場には必ず薬剤師がいる、薬剤師の専門性を發揮しているということ、市役所・市民の方々からは薬剤師を認知されて来ていると思います。

コロナの関係からか薬の配達を依頼されるが多くなりました。患者さん宅を拜見できること、外来では出来ない会話ができるので、自然と親しくなっています。これも地域連携薬局だなと思っています。コロナ禍でもいい事もあるんだなと思います。



最後にコロナもいつかは終息します。その時はコロナ前とは随分変わっていると思います。僕のような古い人間は人との交わりを大切にしていこうと思っています。昭和の時代が懐かしいです。また学友会で皆さんとお会いできることを楽しみにしています。

九州・沖縄地区

九州・沖縄地区における地区薬剤師会の取り組みについて

地区同窓会代表 **中山 大輔**

(平成8年卒)

コロナの影響で、学友会の皆様も様々にご苦勞・ご活躍のことと思います。今年には日薬学術大会が福岡県開催のため、その際に九州沖縄地区での近況報告会の開催などを検討していましたが、感染状況が読めない中、開催を見送ることとなりました。

各地区・各薬剤師会においては、様々にコロナ対策事業に関わっていることと思いますが、この度は私が地区長を務める福岡県京都（みやこ）薬剤師会の活動について、ご紹介させていただきます。

京都薬剤師会が管轄する1市2町の内、1市1町からの要請でファイザー製ワクチンの払い出し業務、集団接種および職域接種へ関わっております。ワクチン払出しは毎週1〜2回、朝8時から急患センターにて行われ、6名前後の役員で担当しております。集団接種は2会場において、火曜日から土曜日まで週5日間、1日当たり8〜16名の会員を派遣しております。主な業務は、服用薬確認・副反応の説明と同意・被接種者からの質問対応となり、予診を補完するような内容となっております。これにより、医師の予診がス

ムースに進み、1会場2時間で250人前後の接種完了を可能としています。また個別接種においても、クリニックに向いて接種をサポートするケースもあります。通常外来業務もある中で、役員・会員一同、今こそ地域に貢献する時とばかりに一丸となって取り組んでおります。

この原稿を執筆している時点で、感染の第5波が急速に拡大しており、収束の気配は全く感じられません。しかし、ワクチンに一縷の望みを託し、感染拡大防止への取り組みを継続して参ります。来年こそは、皆さまと笑顔でお会いできることを楽しみにしつつ：



大学だより

薬学部長就任のご挨拶

静岡県立大学 薬学部長 賀川 義之
(昭和58年卒)



静薬学友会会員の皆様には、日頃より本学薬学部への多大なご支援を賜りまして厚く御礼申し上げます。2021年4月より再度、薬学部長を拝命しました賀川です。2015年〜2018年度の前任時には静薬創設100周年事業の実行に際し、静薬学友会会員の皆様に多大なご協力を賜りまして成功裏に事業を終えることができました。105年という日本でも屈指の歴史を持つ薬学部の責任者に再度就任したことに、

強い誇りを持つと同時に責任感を噛みしめています。

さて、私は静岡薬科大学を1983年に卒業、1985年に博士前期(修士)課程を修了しました。研究室は林栄一教授が主催されていた薬理学教室で、山田静雄先生(現、本学特任教授)から直接の指導を受けました。その後、三重大学医学部附属病院薬剤部に就職し、博士(医学)を取得、20年間薬剤師として勤務した後、当時の辻邦郎薬学部長、三輪匡男薬学研究科長等のご尽力により本学に赴任させていただきました。担当する研究室は臨床薬理学分野です。教育面では、臨床薬学に関連した講義や病院・薬局実務実習を担当しています。研究面では、患者さんの血液から薬物濃度の測定や遺伝子多型の検出を行い、治療効果や有

害事象との関連を薬物動態学的アプローチにより検討することで、治療効果を最大限に引き出し、かつ有害事象を最小限に制御する投与設計法の確立に取り組んでいます。本学では社会人大学院生にも広く門戸を開いており、現在、私の研究室には病院や製薬企業に勤務する大学院生が博士課程で研究に勤しんでいます。

さて、昨年より世界は新型コロナウイルス感染症蔓延下にあり、大学教育も大きな影響を受けています。コロナ禍2年目ということもあり、少しは大学も対応に慣れたかもしれませんが、

まだまだ新しい対応を迫られることが多々あります。まだ終息の見込みがない中、薬学部の講義は大半がインターネット等を用いた遠隔で行われています。昨年度の反省から低学年については、大学キャンパスに通い同級生たちと交流することで大学生としての充実感を持つため、三密を回避した上で可能な限り対面式で行っています。卒業研究や大学院生の研究活動は、感染防止対策を徹底しながら、引き続き学内で継続しています。学外の病院や薬局で行う実務実習はコロナ禍にもかかわらず、薬剤師会や医療施設のご理解とご協力により、現場での体験型

実習がほぼ確保されています。昨今の教育では、大学に限らず能動型・参加型・体験型の学習が重視されています。その一方で、ICTの普及によりインターネットを介した授業形態も進んでいます。コロナ禍はICTによるバーチャルな疑似体験型教育環境を深化させましたが、現在のICT技術では実際の現場での臨場感を体験することは困難であり、医療現場で体験することの重要性は続くと思います。

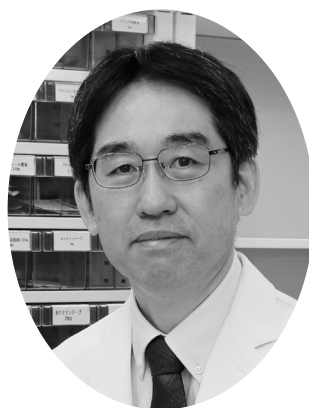
本学では、高校生を対象として研究体験を行うファーマカレッジを20年以上前から開催しています。昨年度は新型コロナウイルス感染症の影響で開催できませんでした。今年度は参加人数を縛った上で何とか開催することができました。一方、オープンキャンパスはインターネット配信で行いました。コロナ禍の不確定な状況の中、薬学部として従来の対面型教育に少しずつ復帰しながら、ICTを活用して教育の質をさらに充実させていきたいと考えています。これからも学友会会員の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

新任教授

母校の教授に就任して

実践薬学分野 教授 内田 信也

(平成5年卒)



静薬学友会の皆様にご挨拶させて頂く機会を与えられ、心から感謝しております。

私は1989年(平成元年)に入学した静岡県立大学の3期生です。ちょうど昭和が終わり平成になった年の入学でした。私が入学した時の先輩(4年生)はまだ静岡薬科大生で、私の入学の直前に小鹿にあった薬科大の旧校舎から谷田キャンパスに研究室の引っ越しをした、と聞かされました。入学当時は、大学の周りの学生用ア

医学部(臨床薬理学)の教官(助手)として医学部での教育・研究活動を経て、2005年に母校である本学に戻ってまいりました。

パートから通う学生だけでなく、小鹿の付近から通う学生も多かったと記憶しています。薬学部の学生は、県立大というよりは薬科大の学生という雰囲気強く残っていた時期でした。当時の写真を見ると、キャンパスの周辺の木々(いちよう、けやき、きんもくせい、など)も、今と比べるとずっと背が低かったことが分かります。

私は薬学部の4年次に薬剤学教室に配属され、修士課程、博士課程と進学时、9年間をこの谷田のキャンパスで過ごしました。今、学内で当時のキャンパスの様子を知っている数少ない一人であると自負しています。博士の学位を取得し、浜松医科大学医学部附属病院薬剤部で薬剤師として勤務し、臨床経験を積ませて頂きました。その後、

子を応用した菓子様製剤を開発し、実際に院内製剤として応用する研究を行っています。患者さんの薬物動態と臨床効果や副作用の関係を解析し、科学的な投与設計を構築する臨床薬理学研究も同時に進めております。さらに薬剤師業務の実践が患者さんの治療にどのように貢献できるのかについての研究を行い、薬剤師業務のエビデンスを作り出してゆきたいと思っています。

このたび母校において静岡県立大学薬学部の教授に就任させて頂きました。もとより浅学非才の身ではありますが、大学と薬学部の発展のために少しでもお役に立てるよう努力したいと存じます。また卒業生の皆様との良いパイプ役を務めさせていただければと願っております。今後ともご指導、ご支援の程、何卒よろしくお願いいたします。

私は薬学部の4年次に薬剤学教室に配属され、修士課程、博士課程と進学时、9年間をこの谷田のキャンパスで過ごしました。今、学内で当時のキャンパスの様子を知っている数少ない一人であると自負しています。博士の学位を取得し、浜松医科大学医学部附属病院薬剤部で薬剤師として勤務し、臨床経験を積ませて頂きました。その後、

また研究室としては、スタッフや学生さんたちと「患者さんに還元できる研究」を目指して臨床製剤学、臨床薬物動態及び臨床薬理学を中心とした研究を行っています。実際の臨床現場を想定し、どのような製剤特性が患者さんのアドヒアランス向上に繋がるのかを解明したいと考えています。また菓

新任教授

大学人としての誇りを胸に誠心誠意

生化学分野 教授 竹内 英之



このたび、令和3年4月1日付けで、

鈴木隆先生から大事なバトンを預かり、生化学分野教授を拝命致しました竹内英之と申します。僥越ながら、静薬学友会の皆様にご挨拶申し上げます。

私は、埼玉県立浦和高等学校を卒業後（当時は高校球児でした）、東京大学に入学し、薬学部に進学しました。生体異物学教室にて入村達郎教授に師事し、消化管粘膜の主成分であるムチンに関する研究を行いました。ムチンは、分子量の50%以上を糖鎖が占める

巨大な分子です。これが、私が糖鎖生物学に足を踏み入れるきっかけとなりました。当時は、現本学副学長の今井康之先生に同じ研究室で大変お世話になりました。研究者として生きるための術を一から御指導下さった入村先生、今井先生には本当に感謝致しております。

私は、2006年に、米国ニューヨーク州立ストーニーブルック大学のRobert S. Haltiwanger博士の研究室に留学致しました。Haltiwanger博士は、Notchシグナルの制御因子として知られていたFringeが糖転移酵素であることを2000年に世界で初めて報告した方で、糖鎖生物学領域で顕著な研究業績をあげておられます。Haltiwanger博士の御指導の下、私は、生物学的に重要な2種類の翻訳後修飾（Notch受

容体のO-グルコース糖鎖修飾とFut/Hippoシグナル系の非定型カドヘリン分子Dactinosisの細胞外部位のリン酸化修飾およびそれを触媒するゴルジ装置局在性キナーゼ）を発見しました。これらは同じ年にCellとScienceに掲載されるといふ僥倖に恵まれました。

Notchシグナルは、多細胞生物において細胞の運命決定に重要な役割を果たす、進化的によく保存された細胞間情報伝達経路です。例えば、哺乳類の発生過程の体節形成、胸腺におけるT細胞分化や腸管上皮幹細胞の自己複製と分化など、様々な生物学的プロセスを制御しています。Notchシグナルは、様々なレベルで調節されていますが、中でも、Notchの細胞外部位における糖鎖修飾が、その活性化に非常に重要な役割を果たしていることが明らかになってまいりました。Notchの細胞外部位には、29-36個の上皮増殖因子様（EGF）ドメインの繰り返し構造が存在し、この部分がリガンドとの結合を担っています。個々のEGFドメインには、O-fucose型、O-glucose型、ならびに、O-GlcNAc型糖鎖が付加さ

れます。O-GlcNAc型糖鎖は、私が昨年度までご指導を賜った名古屋大学大学院医学系研究科の岡島徹也教授によって発見されたものです。現在、Notchを修飾する糖転移酵素遺伝子がほぼ全て同定され、逆遺伝学的機能解析が可能となってきています。先天的な病気だけでなく、種々のがんなどNotchシグナルの異常に起因するヒトの病気はたくさんあります。糖鎖修飾はNotchシグナルの重要な制御メカニズムですので、今後、Notchの糖鎖修飾と病態との関連を追求していきたいと考えております。さらに、薬学的視点から、人類の健康増進、健康長寿に繋がられるような新たな研究展開も志します。

最後になりましたが、伝統ある静岡県立大学薬学部の益々の発展のために、微力ながら、誠心誠意、研究と教育に尽力して参ります。皆様のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

「南アルプスの向こう側」に広がる 新たな世界

統合生理学分野 教授 原 雄 一



築かれた伝統を引き継ぎ、研究室をさらに発展できるように全力を尽くしたく存じます。

私は1997年に京都大学薬学部薬学科を卒業後、京都大学大学院薬学研究科修士課程ののち、2002年に総合研究大学院大学生理学専攻博士課程を修了致しました。職歴として、

2021年4月1日付にて 統合生理学分野教授を拝命いたしました原雄二と申します。静薬学友会の皆様にはこの場をお借りしてご挨拶申し上げます。私は長野県南信州の生まれで、眼前にそびえたつ南アルプスを眺めては「山の向こう側にはどのような世界があるのだろう」と幼少より静岡県に對しあこがれにも似た想いを抱いてまいりました。郷里を離れて30年近くたち、伝統ある静岡県立大学薬学部の教授職を拝命し大変光栄であるとともに、身の引き締まる思いでございます。前任の武田厚司先生をはじめ諸先生方

岡崎国立共同研究機構 博士研究員および京都大学大学院工学研究科 助手として勤務ののち、2005年より米国アイオワ大学医学部に留学致しました。帰国後2012年7月より東京女子医科大学統合医科学研究科にてテニユアトラック准教授、2013年12月より京都大学大学院工学研究科にて准教授として勤務してまいりました。研究内容につきまして、私は「様々な外界からの刺激に応じて細胞、組織、生体がいかに対応・適応するか」という点を研究主題として研究を行ってまいりました。特にカルシウムイオン透

過型イオンチャネル群に着目し、活性酸素種をはじめとした酸化ストレスにより活性化されるイオンチャネルとしてTRP (Transient Receptor Potential) チャネル群の同定およびその生理的意義について従事致しました。また米国アイオワ大学への留学では、骨格筋研究の第一人者であるKevin P. Campbell博士の指導のもと、骨格筋疾患の発症機構の解明に取り組みました。その成果として、骨格筋を構成する筋線維の細胞膜に局在する膜タンパク質ジストログリカンについて、その機能不全が骨格筋疾患を惹起することを世界に先駆けて証明致しました。

現在は上記の研究テーマをさらに発展させ、骨格筋再生に関わる機構の解明を目指しております。骨格筋は筋収縮・弛緩に伴い絶え間なく負荷を受けており、筋組織の恒常性を維持するために骨格筋を構成する筋線維は高い再生能を有しています。筋線維にダメージが加わると、骨格筋に内在する幹細胞(筋衛星細胞)は活性化され筋芽細胞へと分化し、筋芽細胞同士が融合し合うことで長大な筋線維の新生に至ると考えられてきましたが、筋再生機構の全容は未だ明らかではありません。この機構を探る糸口として、骨格筋が

力学的負荷を強く受けることに着目し、物理的な力がいかに筋再生に関わるのか、解明を目指しました。特に細胞膜にかかる膜張力を感知し活性化される機械受容イオンチャネル群が、秩序だった筋線維の形態形成に関わることを明らかに致しました。今後、これまでの研究内容をさらに発展させ、メカノバイロロジーおよび脂質動態に基づく骨格筋再生機構の全容解明および神経筋疾患に対する創薬への発展を目指す所存でございます。

抱負と致しまして、コロナ禍、超高齢化社会をはじめ激動する社会・医療情勢の中、柔軟にたくましく対応できる薬剤師・社会人・研究者の養成に貢献できるような、微力ではございますが全力を尽くす所存でございます。着任当初、通勤で使用する静鉄の車窓から見えた富士山の美しさに感動致しました。そのような新鮮な気持ちを忘れず、郷里から想いをはせた「南アルプスの向こう側」である静岡の地で新たな研究分野を開拓し、神経筋機能を中心とした健康長寿達成に貢献できるように日々精進致します。今後ともご指導賜りますようお願い申し上げます。

新任挨拶

第2の故郷 静岡での新たなスタート

創薬探索センター 助教 村上 央



令和3年4月1日付で創薬探索センターに助教として着任いたしました、村上央と申します。この度は伝統のある静岡県立大学にて教育と研究に携われることを大変嬉しく思っております。静薬学友会の皆様におかれましては、この場を借りてご挨拶を申し上げます。

私は東京薬科大学に入学して、現代医療における薬の役割について学び、その貢献に感動して創薬に興味を持ちました。同大学免疫学教室から研究生活をスタートさせ、同研究室にて修士課程を修了した後、製薬会社で本格的に創薬研究に携わりました。現在、研究室では未充足の医療ニーズのある疾患を対象とした新しい医薬シーズの探索研究を学生たちと共に進めています。

大学で過ごす時間は学生にとって社会に出るまでの大切な期間ですが、コロナ禍の影響は依然として続いています。このような状況でも熱心な学生たちの自ら学ぼうとする気持ちや新しい発見に目を輝かせる姿は変わっておらず、そのような学生たちの前向きな姿勢が、私にとって日々の研究・教育活動に取り組み上で大きな力になっていきます。4月に着任し既に半年が経ちましたが、不慣れた教育活動に悪戦苦闘しつつ、その奥深さを実感しています。学生たちには、実践的で高度な研究を通して論理的思考力や課題解決力を育み、将来の医療や新薬開発を担う薬剤師・研究者として社会に貢献することを期待し、そのために全力で取り組む所存です。

コロナ禍の厳しい状況ではありますが、新しい終息と皆様のご健康を心よりお祈り申し上げます。静薬学友会の益々のご発展に貢献できるよう、日々の研究・教育活動に全力で精進していく所存でありますので、静薬学友会の皆様には、ご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。



薬学分野 助教 山田 幸平 (平成30年卒)

令和二年十月一日付で薬学部 薬学分野の助教に着任いたしました山田幸平と申します。静薬学友会の皆様にはこの場をお借りしてご挨拶申し上げます。

私は滋賀県長浜市で生まれ育ち、滋賀県立彦根東高校を卒業後、本大学の薬学部に入學しました。学部3年次まではサッカー部とフットサルサークル(Peas Patto)の活動、アルバイトに明け暮れる日々で決して勉学に熱中してはいるような優秀な学生ではありませんでした。学部4年次より現所属先である薬学分野(尾上 誠良 教授主宰)への配属が決定し、博士後期課程まで一貫して薬剤学研究に取り組んできました。研究室配属後は非常に忙しく、文献調査、実験、データ解析、考察に加えて後輩指導と時間がいくらあっても足りない生活で、ある意味で学部3年次までに培ったタフさが研究室生活を支えていたなと感じています。

私の研究は、消化管・鼻腔・肺など粘膜組織からの薬物吸収制御を指向した製剤開発、そして動物実験を行わずに薬物・製剤の体内動態を解析可能な*in silico* モデルの構築、この2つの柱から成っています。これまでの製剤開発事例としては、消化管寄生虫病治療薬を病原虫の寄生部位である小腸へ効率的に曝露する粘膜付着性徐放性製剤や呼吸器疾患治療への応用を念頭に置いた気道内滞留型ナノキャリアの開発が挙げられます。研究を推進するにあたり学生時代から引き続き米国 Princeton 大学、豪州 Sydney 大学、中国 Fudan 大学のほか、いくつかの製薬企業とも連携させていただいており、素晴らしい研究環境を享受しております。この環境にしっかりと感謝しながら日々研究に取り組む、「成果」という形でお世話になっている皆様方に恩返ししていく所存でございます。

至らない部分も多いかと思いますが皆様からご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

退職に際して

全ての出会いに感謝



前 生化学分野 教授 鈴木 隆

(昭和54年卒)



定年退職を迎え、これまでの人生を振り返るとき、「人との出会いが人生の大きな岐路になる」ことを実感している。私は静岡薬科大学大学院薬学研究科博士課程を修了後、約8年間企業研究者として勤務し、平成3年10月1日に静岡県立大学薬学部薬学科(生化学教室)の助手に採用された。以下の内容は私の退官記念誌にも記したが、平成3年(1991年)の春頃、恩師

の鈴木康夫先生(生化学教室第3代教授、静岡県立大学名誉教授)から突然会社に電話があり、「生化学教室の助手にならないか」と誘いを受けた。会社での研究生活に不満は無かったが、もう一度自分の力で好きな研究に挑戦してみたいとの思いが次第に強くなった。妻も応援してくれたため、大学に戻ることを決心し、同年10月から静岡県立大学に助手として採用された。辞令が交付された10月1日は早朝から激しい雨が降っており、草薙駅前から大学への道は路面を川のように雨水が流れ、買ったばかりの革靴は中まで水が入り、大変な思いをして大学に到着した。そして、当時学部長であった矢内原昇先生に連れられて学長室に案内された。その際に、内園学長から「大学

は決して甘い所ではありません。3年間で成果がでなければ辞めてください。」と訓示され、緊張と不安でいっぱいになったことが今でも鮮明に思い出される。助手に採用された当初は原著論文も無く、研究費の獲得にも苦労したが、鈴木康夫先生に誘っていたこと、鈴木康夫先生に誘っていたこと、大学教員としてその後の研究生活を送ることができたのである。私の人生に大きな影響を与えてくれたことに心から感謝したい。また、私は令和3年3月31日に静岡県立大学薬学部薬学科(生化学分野)ならびに薬学研究院(生化学教室)教授(兼務)を定年退職するまで多くの学生諸君や先生方に助けられて、29年間の長い期間、教育と研究に従事することができた。

私は、ヒトパラインフルエンザウイルスの受容体と創薬への応用に関する研究、インフルエンザウイルス感染とシアル酸分子種の認識に関する研究、ノイラミニダーゼの毒性性と感染機構に関する研究、硫酸化スフィンゴ糖脂質(sulfatide)のインフルエンザウイルス感染における機能解明と創薬への応用に関する研究、シアリダーゼ検出用新規蛍光基質の開発と高感度イメージング法の確立と応用に関する研究、脳神経組織、臍臓、皮膚等におけるシアリダーゼの機能解明と応用に関する研究など多くの研究成果を上げることができた。また2011年には平成24年度OCHAパイオニア賞学術研究大賞を、また2016年には平成29年度日本薬学会学術貢献賞を受賞することができた。これらの研究成果は、生化学教室に在籍した多くの学生諸君と教員ならびに共同研究をさせていただいた広島国際大学薬学部の池田潔教授を始めとした先生方に支えられて達成できたものである。また、役員、理事、副会長として学友会報の編集、薬学生涯研修講座の開催、静薬創立100周年記念事業等を含めた静薬学友会の活動や運営に15年以上参加させていただき、多くの先輩や後輩の卒業生と親睦を深めることができた。

結びにあたり、静岡県立大学薬学部ならびに静薬学友会が益々発展していくことを確信しつつ、生化学教室の在学生、卒業生、薬学部教職員、静薬学友会の関係者の皆様方のご厚意に深く感謝申し上げる次第である。

過去から学び未来へ

前 統合生理学分野 教授 武田厚司

(昭和53年卒)

これまで統合生理学分野を担当してきましたが、2021年3月末で静岡県立大学を定年退職しました。学生時代を含め静岡薬科大学・静岡県立大学での47年間、静薬学友会の皆様にお世話になり、ご挨拶申し上げます。静岡薬科大学に1974年に入学し、生理学に興味を持つきっかけを得ることができました。大学院修士課程修了後、放射薬品学教室(現医薬品生命化学分野)で助手に採用され、その後、静岡県立大学薬学部放射薬品学教室講師、医薬品生命化学分野助教を経て、生物薬品学分野(現統合生理学分野)教授に就任しました。その間に多くの出会いがあり、自分の人生は変わり、予想外の道を歩むこととなりました。それは大学の教育・研究の道でした。研究テーマは、当初は画像診断用放射性医薬品の開発に関する研究でしたが、その後、亜鉛、マンガン、鉄などの生体微量元素の生理機能解析に変わりました。研究を進めるなか、脳生理学の基盤はゼロでしたが、ニューロジック研究に大きな興味を持ちました。そして、亜鉛摂取不足によりストレス感受性が高まるため、この不足が鬱の一因

となること、てんかんなどの脳疾患を悪化させることを明らかにしました。また、記憶の獲得・維持・想起には神経細胞内シグナルファクターとして亜鉛イオンが必要であることを明らかにしました。その一方で、神経細胞内亜鉛イオンの恒常性が破綻すると(亜鉛イオンレベルが過剰になると)、記憶の獲得・維持・想起ができなくなることを世界に先駆けて明らかにしました。これを機にAshley Bush教授(メルボルン大学)との、アルツハイマー病の原因物質と考えられているアミロイドβタンパク質(Aβ)と亜鉛イオン毒性との関係に関する共同研究が始まりました。すでにAshley Bushはこの分野の研究成果をNature, Scienceなどに掲載していました。Aβのなかで、最も毒性が高いアミノ酸42個からなるAβ₁₋₄₂は細胞外亜鉛イオンと結合し、速やかに神経細胞内に取り込まれ、細胞内ではAβ₁₋₄₂から亜鉛イオンが遊離し、神経毒性を示すことをはじめ明らかにしました。さらに、この細胞内亜鉛イオン毒性は予め細胞内亜鉛イオン結合タンパク質であるメタロチオネインのレベルを増やすことにより軽減できる

ことを明らかにしました。重金属など様々なメタロチオネイン誘導物質がこれまで知られていましたが、残念ながら血液脳関門を通過して脳内に移行する有用な誘導物質は知られていませんでした。そんななか、漢方薬の人参養榮湯やイグサ成分により脳メタロチオネインが誘導合成され、アルツハイマー病が予防できる可能性を実験動物レベルで示すことに成功しました。一方、アルツハイマー病とともに、進行性神経変性疾患であるパーキンソン病の原因は明らかではありませんでした。神経伝達物質であるドパミンから産生される活性酸素が黒質ドパミン神経細胞内亜鉛イオン毒性を惹起すること、

この亜鉛イオン毒性が黒質ドパミン神経の選択的な細胞死の一因となることをはじめ明らかにしました。以上、ニューロジック研究などをはじめ一緒に研究に携わってくれた学生たちの惜しみない協力と努力により独自の脳研究を進展させることができました。脳科学を基盤とする健康長寿をスローガンに教育研究に最善を尽くすことができました。

2021年3月19日学位授与式



2015年9月19日還暦祝賀会



県大のBranding designがいくる Sustainableな進歩を大切に！

帝京平成大学薬学部・創薬基盤教育研究部門・物理薬剤学ユニット教授・ユニット長

前 実践薬学分野 教授 並木 徳之



私は薬学6年制教育の開始に伴い実務教育を担当するために、2008年4月に静岡県立大学薬学部に着任した。私の本務は、臨床薬学演習、実務事前実習、そしてOSCEであったが、共用試験のスタートを翌年度に控えているにも関わらず教育のための実習室や設備が全く存在しない中、いきなり孤軍奮闘の毎日が始まった。気の毒なことに、突然実践薬学へ配置換えとなつてしまった内田准教授（現在教授）と共に、汗まみれになって片付けに追われた。研究室のほうも、雑然とした小

さな化学実験室のみを与えられただけで、机も椅子もない中、体育館の倉庫から黙って持ってきた木の机と丸椅子だけの生活がしばらく続いた。正直なところ心が折れそうになったが、奥学部長（現帝京大学薬学部長）と賀川教授（現学部長）の強力な後押しや、若い教員や事務職員の方々、そして地元静岡県の薬剤師会の先生方の温かいサポートがあつて、なんとか、模擬薬局の竣工に漕ぎつけることができた。模擬薬局の開所式るとき、内田准教授と共に感涙の思いに浸ることができたことは忘れられない。今となっては、当たり前のように、順風満帆に実施できるようにになった事前実習やOSCEであるが、県大のBranding designがつくってきたSustainableな進歩の一つとして胸に刻んでいる。

この一方で研究においては、実践的な製剤設計学と臨床製剤学の研究を開

始した。昨今、服薬アドヒアランスは治療の成否に関わる重要な要因であるとの認識が高まってきたが、私が病院に勤務し始めた40数年前はそれほど大きな問題として捉えられていなかった。医師や薬剤師は「薬を飲まないのは患者さんの責任」と済ませてしまうことも少なくなく、製薬会社の研究者も「良薬は口に苦し」と新薬探索に多忙で薬剤の服用性の改良には消極的(?)であつたように思える。服薬アドヒアランスが低下すれば当然のことながら期待する治療効果が得られる可能性も低下すると考えられるが、このような場合、医師は薬の効果が不十分だと考え、薬の量を増やす、強い薬に切り替える、あるいは薬の種類を増やす傾向にあり、薬物治療の軌道が患者の疾患本来の姿と異なってくる。ここで生じるのが、薬による有害事例である。このような事態が年々深刻度を増し、私が大学に移籍した10数年前頃から、残薬と医療費削減、有害事例の回避を目的に、医療では服薬アドヒアランスを重要視し服薬不履行の原因解明と改善に取り組み始めた。そして製薬企業でも、新たなビジネスモデルとして服薬アドヒアランス対策を製剤設計

に積極的に取り入れるようになってきた。そこで私は、服薬アドヒアランス向上を目指した製剤の設計に関する研究を開始し、グミ製剤、口腔内崩壊錠(OD錠)などの易服用性製剤の開発を行ってきた。とくにOD錠については、製薬企業との共同研究や製品化プロデュースを通じて、臨床投入に成功し汎用されている製剤も散見することから、医療に多少なりとも貢献することができたと考えている。またこれらの研究成果をもとに、13年間の大学在籍中に27名の大学院生が博士学位を得てきたことは至上に喜ばしいことで、多くの学生諸君の健闘を祝福したい。

この度、2021年3月に定年退職するに際して、幸運にも静薬学友会より退職に際しての執筆の依頼を頂戴した。身に余る光栄である。学外から赴任してきた実務家教員でありながら温かく迎え入れてくださり、これまで教育と研究を続けることができたのは、県大の先生方は勿論のこと、静薬学友会の先生方、当該研究室の教員、学部生、大学院生のお陰である。恐縮ではあるが、この度の執筆の機会を有難くお受けし、多くの同窓生の先生方に感謝の気持ちをお伝えしたいと思う。

研究室だより

生化学分野

生化学分野では、昨年度末で鈴木隆教授が御定年退職を迎えられ、本年度より新たに竹内英之教授が着任されました。生化学分野では、核酸やタンパク質と並ぶ第三の生命鎖である糖鎖の機能解明と創薬への応用を目指し、Zoonz、グナル・ウイルス・神経をキーワードに、高橋忠伸准教授、南彰講師、紅林佑希助教がそれぞれ研究室を担当し、研究を進めております。生命科学を俯瞰し、糖鎖利用技術の開発を含め、異分野融合研究の革新的展開を図るため、岡島徹也教授（名古屋大）、池田潔教授（広島国際大、S54年静薬卒）、平林義雄教授（理研・順天堂大・本学、S48年静薬卒）をはじめ御専門の異なる先生方との共同研究を推進しております。今年度、当分野には、大学院博士後期課程4名、大学院博士前期課程3名、学部6年6名・5年4名・4年6名の計23名の学生が所属しています。

昨年度は新型コロナウイルスの影響で、自宅待機が始まりましたが、本年度は感染対策を施しながら研究活動を行っております。学生は精力的に研究や勉学に取り組み、学会でも賞を受賞しています。ここ1年間の受賞は、第19回次世代を担う若手ファーマ・バイオフォー

ラム（藤田優香さん）、糖鎖科学中部拠点第16回若手の力フォーラム（進藤貴裕さん）、本学薬学部成績優秀者賞（藤田優香さん）です。

その他、最近の研究内容や成果、トピックスについては、当研究室のホームページ（<https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/biochem/>）をご覧ください。生化学分野では、現在LINEを利用した卒業生グループがございます。登録を希望される方は、南（aminami@u-shizuoka-ken.ac.jp）までご連絡下さい。教室員一同、コロナ禍が早期に終結し、卒業生の皆さまに会えることを楽しみにしております。



2021年4月 集合写真（撮影時のみマスクを外しています）

衛生分子毒性学分野

吉成教授が赴任して8年目の衛生分子毒性学分野は、国民衛生向上と創薬に向けた化学物質の安全性の評価をテーマとして、化学物質毒性の発現機序の解明や化学物質の毒性を評価・予測する手法の開発を目指して日々研究を行っています。

化学物質の毒性は多彩で、その発現機序は非常に複雑です。そのような毒性の発現機序を明らかにするため、私は特に、化学物質に対する生体応答にかかわる核内受容体、化学物質の解毒や毒性発現にかかわる薬物代謝酵素に着目して研究を行っています。近年では、核内受容体の活性化機序の解明、核内受容体を介した発がん機構や、がん抑制機構の解明、インビトロインシリコ手法を利用した薬物性肝障害評価手法の開発に関する研究成果を挙げています。これらの研究成果は、今年『J Bio Chem』誌を含む学術論文12報に報告しており、昨年は8報に報告しています。さらに、昨年度は多くの学会がウェブ開催になってしまいましたが、日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会2020で6年生の西口輝君がベストプレゼンテーション賞を受賞することができました。これら多くの研究は、学生たちの日々の努力と共同研究者、関係者のご協力、ご支援により進められているものと思います。



2021年3月19日 卒業式に卒業生と

また、このような状況の中、教室旅行、歓迎会などのイベントは開催することはできていませんが、学生たちは七夕には笹の枝にそれぞれの願い事をつるして飾るなどして研究室生活を楽しんでいきます。研究成果、学会発表、イベント等の教室員の活躍は当分野のホームページ（<https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/eisei/>）に随時掲載して参りますので、是非ご覧ください。末筆ながら、同窓生の皆様におかれましては今後とも変わらぬご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

薬理学分野

令和2年度後期より、3年生が研究室に配属されることになり、研究室がより一層、賑やかになりました。

新型コロナウイルスの影響により研究室内での親睦会やOB会等が実施できておりませんが、落ち着きましたらOB会を盛大に開催する予定です。その際には、たくさんの卒業生の皆様のご参加をお待ちしております。
お知らせ

令和3年5月に、薬理学教室のホームページをリニューアルしました(<https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/~pharmac/>)。是非、遊びにいらしてください。アルバムのパスワードは、薬理学教室お馴染みのパスワードとなっております。

金子雪子先生が、令和2年度薬理系薬学部会奨励賞を受賞され、令和3年8月27日に北海道で開催された生体機能と創薬シンポジウム2021で受賞講演をされました。また今年度より博士課程3年 土肥直貴さん(DC2)と博士後期課程1年 大岡史さん(DC1)が学術振興会特別研究員に採用されました。

研究活動

薬理学教室では、現在、主に糖尿病関連疾患を研究ターゲットとし、薬理学的解析はもとより、電気生理学、生化学、分子生物学、遺伝子工学的解析を駆使することで、膵内分泌細胞や肝

星細胞の機能調節に関わるシグナル伝達研究を行っています。

研究を行う上で最も大切なことは、研究の背景を理解し、その研究の目標や目的を明確に定めることです。そして、実験終了時には、その研究成果を英語論文として発表することが重要です。研究体制は変わっても、今後もうした研究のプロセスを学生が実践できるよう、指導を続けていく所存です。



2020年12月23日大掃除後、石川先生の還暦をお祝いし写真撮影だけ行いました。(静岡県立大学6329講義室にて)

医薬生命化学分野

我々、医薬生命化学分野が専門とするナノ粒子を用いた薬物送達システム(DDS)は、創薬シーズや既存薬の価値を高めるいわば薬の理想を追求する研究分野です。現在ではがん、脳梗塞、炎症性腸疾患、および腎疾患などをターゲットにして、先駆的な基礎研究を展開しております。昨年からは新型コロナウイルス禍により、様々な変化に対応することを強いられておりますが、着実に研究を進めるよう研究室一丸

田真也さんが優秀発表賞を受賞しました。最近の研究成果ならびに教室の活動状況はホームページに掲載しておりますので是非ご覧下さい(<http://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/~radio/>)。最後になりますがOB・OGの皆さま、ご健康にはくれぐれもお気を付けてお過ごしください。皆さまに会える次の機会を研究室一同楽しみにしております。

となって取り組む毎日です。例年行っていたスポーツ、懇親会、研究室旅行等は中止していますが、最近の出来事として2020年10月に岡田さん(研究室OGです)、2021年4月に青島さんが研究補助員として研究室メンバーに加わり、研究室を活気づけてくれております。本分野は、教員4名、客員教員2名、研究補助員2名、秘書1名、社会人大学院生3名、学生18名の合計30名体制となりました。2020年7月に開催された、第66回日本薬学会東海支部総会・大会におきましては、小出裕之講師が「日本薬学会東海支部学術奨励賞」(演題名「合成高分子ナノ粒子による標的分子の吸着と中和」)を受賞しました。また、2021年7月に第67回日本薬学会東海支部にて林純衣さんと平



2021年7月12日集合写真 校門にて

身体運動科学分野

本学にて任し身体運動科学分野を担当して7年目を迎えました。担当科目では、私の専門分野である健康管理学や健康運動心理学の観点を活かした授業を行っています。また研究室としては、健康の維持・増進を図り、社会環境と良好な関係を構築する上で必要な知識・スキルの習得や、運動実践による心理的効果などに関する調査研究及び教育を行っています。

私は、本学全体での身体運動科学の通年17・5本の授業運営に加え、体育関連の用具・施設の管理、非常勤講師のコーディネート、体育会部活動活性化のための支援活動なども一手に担当しております。

大学における体育授業は、身体活動を習慣化する最後の機会となります。日々の授業では、運動技術の習得のみならず、体育を一つのツールとして、学生が自信やライフスキルを身に付けられるような実践を行っています。授業の内容や進め方を工夫することで、体力向上・技術習得はもちろん、メンタルヘルス改善の効果も期待できます。また、特に1年次における体育授業は「仲間づくり」の場にもなり、大学生活への適応や良好な人間関係の構築のためにも必要不可欠な科目です。

ここ数年では、テニスコートの修繕や新たな部活動設立支援のほか、各施設の利用者説明会開催、施設毎に使用

上の注意看板を作成することで、本学施設をより気持ちよく利用していただけるよう貢献して参りました。また夏期には、アーチェリーやトラランポリン、オリエンテーリングなどの新しいスポーツ種目を体験できる機会を設けました。このような新しい取り組みを通じて、本学の学生・先生方に身体運動科学の考え方を広げられたと感じています。

身体運動科学分野は、今後もよりよい授業作りはもちろん、積極的なスポーツ環境整備に継続的に取り組むことで、地域に貢献し未来を担う学生が本学から羽ばたいてゆける環境づくりに努めて参ります。今後とも変わらぬご支援とご指導を賜りますようお願いいたします。



ライフスポーツ アーチェリー授業集合写真 (2020年9月撮影)

生体機能分子分析学分野

当分野は今年度も轟木教授、水野准教授、杉山助教の3人体制で、名誉教授の豊岡先生にもサポートいただきながら、学生と毎日精力的に研究を行っています。

当研究室の主な研究テーマは、次世代バイオ医薬品の新規分析法の開発、単一細胞メタボロミクスのための超微量成分の高感度・高精度分析法の開発、オミクス解析のための新規分析ツールの開発、質量分析イメージングのための特異的検出法の開発などを行っています。また、各種疾患の早期発見や再発予防、薬効評価を目的として、ポイントオブ検査法の開発や、無侵襲検査法の開発等も進めています。轟木教授が「河合塾みらいぶプラス」で紹介されておられ、研究室HPに記事のリンクを追加しておりますので、ご覧いただけますと幸いです。

研究を支えてくれている学生諸君は、日々切磋琢磨しながら高いモチベーションで研究を行っています。その成果は、昨年度の本学卒業論文発表会における優秀発表賞、学会での優秀発表賞受賞6件など、学生個人としても高く評価されました。また、杉山助教は日本薬学会における物理系薬学部会奨励賞を受賞しました。

昨年度の修了・卒業生は、アステラス製薬、アストラゼネカ、KMバイオロジクス、エーザイ、産業総合技術研

究所、スギ薬局への就職や博士前期課程への進学を選択し、各々の道で活躍しています。今年度も新型コロナウイルス感染症の影響が避けられず、例年通りの活動が難しい状況にありますが、引き続き価値ある研究成果の創出と良い人材の育成に努めて参ります。詳しい研究内容、研究室行事、学生の活躍等は、研究室HPでご覧いただけます。最後になりますが、静薬学友会の皆様には変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。



2021年4月 芝生公園にて (撮影時のみマスクを外しています)

医薬品製造化学分野

医薬品製造化学分野を16年にわたり率いてこられた菅敏幸教授が、令和3年7月24日にご逝去されました。現役真つただ中での突然の不幸に、残念と申し上げるしかありません。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

当分野では「生理活性天然物の全合成」を主要テーマとして、医薬品の開発をめざした有機合成化学の研究を行っています。また教育面では、次世代を担うたくましい有機合成化学者の育成に主眼を置き活動しています。その一環として、勉強会「天然物全合成道場」を毎週開催して（現在オンライン開催）、有機合成の総合的な実力を必要とする天然物合成のイロハや考え方を教授し、学生の有機合成力を鍛えています。この道場はアメリカ化学学会有機化学部門のHPでも紹介されました。これまでの活動状況を当研究室HPに掲載していますので是非ご覧下さい。また、この一年のうれしいニュースとして、大内仁志助教が有機合成化学協会東海支部奨励賞を、相良浩人、西澤慈、新田目かおりが国内学会での発表賞を受賞しました。

令和2年度の研究室配属では、4名の薬学科生を含む学部生が6名配属されました。また、4



学位記伝達式 2021年3月

月には芝浦工業大学出身の大学院生が加わりました。やる気に満ちた彼らが、研究室に新風を吹きこんでくれるものと期待しています。3月に研究室を巣立った学生は、相良浩人博士、新田目かおり修士、岩本拳司修士、平濱俊哉修士、藤井りょう修士です。卒業生の皆さんの活躍を祈っています。

今年も昨年に引き続きコロナの影響で研究室のイベントが中止になり辛い状況が続いています。このような状況下でも研究室メンバー一同、研究・教育に日々頑張っています。今後とも、皆様からのご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

生薬学分野

生薬学分野では、渡辺賢二教授を中心として、天然物生合成メカニズム解明および医薬農薬となりうる活性物質の探索に取り組んでいます。恒松雄太講師、佐藤道大講師、岸本真治助教が中心となって各研究を進めております。

当分野では現在、基礎研究のみならず、静岡県立大学発ベンチャーとして我々が設立した株式会社アデノプリベントをはじめ他分野の先生方との共同研究により、大腸がん原因物質であるコリバクチンの検出、さらにはコリバクチン産生菌の検出法の開発にも取り組んでおります。現在、

当分野は大学院博士後期課程2年1名、1年1名（カナダからの留学生を含む）、大学院博士前期課程2年2名・1年3名（中国からの留学生を含む）、学部6年1名・5年3名・4年6名の計17名の学生、特任助教4名、研究支援者1名、研究補助員2名、株式会社アデノプリベント社員2名が所属しています。

本年度も元気いっぱい研究に取り組む多くの論文を発表しています。学生は精力的に研究や勉学に取り組む、多くの賞を受賞しています。

<https://sweb.u-shizuoka-ken.ac.jp/~kenji55-lab/>

末筆ながら、静薬学友会の皆様には変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。



薬剤学分野

現在、薬剤学分野は、教員3名（尾上教授、佐藤准教授、山田助教）、大学院生博士課程7名、修士課程5名、学部生13名のメンバーで研究・教育活動を邁進しております。山田幸平助教は2020年10月に着任されました。当分野における教育・研究活動や各種イベント等に関しては、Webサイト (<https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/yakuzai/>) にてタイムリーに報告しておりますので、定期的にご覧頂きますと幸いです。

クスリを逆から読むと「リスク」(risk) となりますが、実際に薬効と副作用は表裏一体で、どのようなクスリでも副作用は発生してしまいます。そこで私たちは投薬した後のクスリが体内でどのように動くのか詳細に把握し、そのクスリの体内での動態制御による薬効改善・副作用回避を目指して次のような研究を推進しています。

(1) 薬物動態制御による副作用の回避、(2) ナノテクノロジーや物性制御を利用した薬物動態・薬効の改善、(3) 病態下の薬物動態変化解析とその戦略的な回避方法探索、(4) 薬物の物性・動態情報からの副作用リスク予測。

本研究室出身者は、薬剤学に関する基礎研究から臨床研究まで視野にいられた幅広い経験を活かし、医療機関、製薬・食品企業、行政機関や教育機関な

ど様々な分野で活躍されています。今後も研究活動を通じて薬の専門家としての研究技能・知識とコミュニケーション能力を併せ持つ薬科学者を育成し、変化し続ける社会のなかでリーダーシップを発揮できる人材を輩出できるよう邁進して参ります。今後とも皆様からのご支援を賜りますようお願い申し上げます。



卒業式での集合写真 (2021年3月19日)

創剤科学分野

近藤啓教授が当分野を主宰して4年目、現在の金沢貴憲准教授、照喜名孝之助教の教員3名体制となって2年目になります。本年度は、大学院生博士課程4名、博士後期課程3名、博士前期課程5名、学部生12名の計27名がメンバーです。「モノづくりに繋がる理論を構築しよう」をキーワードに、学生一人一人が考え、仮説を立て、検証するサイクルを繰り返すことで課題提案型思考を醸成しています。当分野が扱う創剤学はユーザーに最も近い学問領域の一つです。「自分が創った製剤を大切な人に投与することができるか」を常に問いながら研究を進めるように指導しています。

薬学を取り巻く環境の変化は著しく、取り扱うモダリティは多様化しています。当分野の先輩方が積み上げた経験と知識をさらに発展させるとともに、ナノファイバー技術を利用した新規製剤開発、レオロジー解析に基づく製剤設計、脳への薬物送達を可能にするナノ粒子検討、など新たな研究課題にも取り組んでいます。現在取り組んでいる研究テーマや行事等については、当分野のHP (<https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/pharmeng/>) にて紹介しています。お時間が許すときにご覧いただき、ご指導いただけますと幸いです。

依然として新型コロナウイルス感染

の影響を受け、研究活動や様々な行事は制限を受けていますが、学生は薬学の楽しさを追求する気持ちを持ち続けてくれています。昨年の10月以降、30件を超える学会発表を行い、日本薬剤学会第36年会では6年生の角田賢哉さんが永井財団学部学生七つ星薬師奨励賞を、第67回日本薬学会東海支部大会では4年生の田中惇さんが学生優秀発表賞を受賞しました。また、科研費の採択、投稿論文の受理など、研究室の成果が少しずつではありますが出始めました。研究活動を通して薬を創る(研究者) および薬を扱う(薬剤師) 役割を担う人材を継続して育成して参ります。今後ともご支援のほど宜しくお願いします。



2020年11月 研究室メンバーの集合写真

分子病態学分野

分子病態学分野は森本達也先生が2009年に教授に就任してから今年で12年になります。今年には教員4名、研究補助員1名、大学院生5名(うち博士課程3名)、学部生17名の総勢27名で研究に学会発表、地域でのイベントとコロナ禍ではありますが、日々慌ただしく過ごしております。

当研究室では、心血管疾患の創薬を目指し「心不全発症に関わる心筋細胞内シグナル伝達機構の解析」をテーマに研究を行っています。博士課程の清水果奈さんの研究成果であるクルクミン誘導体GO-Y030の心肥大・心不全に対する検討結果がScientific Reportsに、清水圭貴くんの研究成果であるメトホルミンのp300-HATや心筋細胞肥大の抑制効果がJournal of Pharmacological Scienceに掲載されるなど、大学院生が頑張っており、着実に研究を進めております。長年、本研究室で研究に携わってきた船本雅文君は、球状ドメインのアセチル化と心不全進展との関連を明らかにした研究成果をInternational Journal of Biological Sciencesに発表するなど、多数の研究成果を上げました。博士号を取得した後、今年の7月より徳島大学医学部薬理学分野の助教に就任しました。今後の活躍に期待しております。また、刀坂泰史講師が2019年度 日本抗加齢医学会 研究奨励賞、博士後期課程3年生の清水聡

史さんが第143回日本薬理学会関東部会 Young Investigator Award、学部生の高井秀通君が第4回ノビレチン研究会学術研究会にて学生優秀発表賞を受賞しました。本研究室が研究論文はFacebook (<https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/byoutai/index.html>) に逐次報告しておりますので、是非ともご覧ください。

新型コロナウイルス感染症の影響もあり、普段とは様相が異なる生活を強いられておりますが、OB・OGの皆様、ご健康にはくれぐれもお気を付けください。またお会いできる機会を楽しみにしております。

最後になりますが、静薬学友会の皆様には今後も変わらぬご支援、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



2020年12月 卒論発表会にて

生体情報分子解析学分野

生体情報分子解析学分野は、黒川光子教授が着任してから今年で5年目となりました。令和2年度末には山崎泰広講師が湘南医療大学薬学部准教授にご栄転なさり、研究室員一同、ますますのご発展を祈念しております。令和3年度は、浜松医科大学を御退官された渡邊泰秀先生が客員教授としてラボに加わってください。大学院生2名学部生17名、黒川教授、坂本准教授、山口助教、秘書・山崎の総勢27名で活動しています。新型コロナウイルス感染症の影響でラボ内ミーティングは完全オンライン化し、メリハリをつけたニューノーマルな研究活動体制に移行しています。当分野のミッションである「性差(個別化)医療に貢献する薬理学研究」は不変であり、薬物療法の標的組織の生理学的特性に応じた薬理作用について、イオンチャネルなど膜タンパク質を中心に分子レベルで理解することを目指しています。具体的には、心血管病や骨格筋の炎症の性差機構解析、ヒトiPS由来心筋の創薬応用、そして腎臓・脂肪・肝臓に関する性差がテーマです。これらの研究を支えてくれている学生諸君は研究に対して日々活発な議論を交わしており、その成果は様々な学会で発揮されております。最近1年間を振り返ってみますと、昨年11月の日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学

術大会2020では杉本真太郎さんと西山麗沙さんがベストプレゼンテーション賞を、3月の日本薬学会年会で稲田理毅さんと長沢思音さんが学生優秀発表賞、第94回日本薬理学会年会で長沢思音さんが年会優秀発表賞を受賞しました。また、坂本准教授が日本薬学会薬理学系部会学術奨励賞を受賞されました。

3年前期の医療系薬学実習(薬理)では、マグヌス実験やMindの血圧測定を担当し、未知検体実習も取り入れています。研究室配属時の新人教育に、未知検体実習(特訓)を取り入れた成果が現れ、指導学生を中心に、どの班も議論が活発に行われました。今後とも、皆様からのご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

春の集合写真(撮影時のみマスクを外しました)



春の集合写真(撮影時のみマスクを外しました)

臨床薬剤学分野

臨床薬剤学研究室は、学部運営上、薬局管理学を含めて活動しています。研究インフラは草薙キャンパスと静岡県立総合病院内にあります。病院内の研究室は、2002年に開設され、2008年に循環器病センターに移設され、さらに2017年9月からは新築された先端医学研究棟内に再移設されました。地方自治体が設立した病院内に薬学部の研究室を設置することは極めて珍しく、内外から注目されています。

教育面の実習関係では、6年制課程の病院・薬局実務実習（5年次）を担当しています。本学では、病院内に専任教員6名を配置して、教員主導型臨床教育を行う、いわゆる米国型薬剤師養成教育を行っています。臨床薬剤学研究室では、その中核をになっています。講義では、薬学概論（1年次）、早期体験学習（1年次）、医薬品安全性学（3年次）、薬学と社会Ⅰ（3年次）、医薬品情報Ⅱ（4年次）、調剤学（4年次）、薬物治療学特論（大学院）等を担当しています。薬学概論、薬学と社会Ⅰ、調剤学の講義では、薬学キャリアデザイン近藤寄附講座との連



2021年度3月の集合写真

携により、本学出身者を非常勤講師に迎えています。研究面では臨床現場の問題点を臨床薬物動態学、臨床薬理学のおよび臨床製剤学的アプローチで解決する研究を行っています。臨床研究では症例数の集積に時間がかかり、数年をかけて論文1報を完成させるような根気強い研究姿勢が必要になります。当研究室では、学生、大学院生（博士課程4名）および教員が一丸となり、粘り強く、かつ質の高い薬学研究を通して、薬物治療成績の向上に取り組んでいます。これからも、当研究室は臨床薬学研究で社会に貢献できる卒業生や修了生を輩出できるよう精進していきます。

臨床薬効解析学分野

当分野は2005年に伊藤教授主宰のもと開設され、現在は井上准教授、辻講師、平井講師の4名体制で、大学院生7名、学部生18名と共に研究を行っています。当研究室は「医療現場からシーズを見つけて研究を展開し、その成果を現場や社会に還元する」ことをモットーに基礎と臨床の橋渡し研究に積極的に取り組んでいます。静岡県立総合病院にも研究室を設置しているのが当研究室の特徴で、2017年には病院内に新設された先端医学棟に研究室を引越し、県立総合病院をはじめ県内外の医療機関等と連携し、臨床的な課題に対して共同研究を進めています。このような研究活動により、今年度は平井講師が日本医療薬学会奨励賞の受賞者に決定し、博士課程1年の上原星輝子さんが近畿北陸軌道疾患研究会にて最優秀賞を受賞、学部6年生の天野美歩さんが日本臨床薬理学会東海北陸地方会にて一般演題 優秀賞を受賞しました。

教育面では、県立総合病院における実務実習指導という重要な役割を担っており、改訂モデル・コアカリキュラムに対応した実習がより充実したものとなるよう、教員一同で日々取り組んでいます。

昨年には伊藤教授が還暦を迎えられました。記念する同門会を計画しておりましたが、残念ながらコロナ禍で叶

わず…。しかし、同門生より多くの祝福のメッセージをいただき、近況がわかる写真とともに一冊のフォトブックにまとめプレゼントすることができました。また、当研究室で開設当時から2013年度まで講師を務められた林秀樹先生が、岐阜薬科大学に異動され、本年8月より教授に昇任されました。おめでとうございます。今年も同門会の開催は難しい状況ですので、初のWeb同門会を11月に計画しております。同門生の皆さんは奮ってご参加いただければと思います。

研究室行事や研究成果は、ホームページ、またはFacebookに随時公開していきますのでご覧ください。これからも精力的に研究活動を行いつつ、充実した研究室生活を過ごせるよう努めていきたいと思えます。今後とも皆様のご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



2021年3月19日 卒業式にて

医薬品情報解析学分野

当研究室は2005年に発足し、本年度で17年目を迎えます。その間、多くのOB・OGを輩出し、病院・薬局を始め、製薬会社の統計解析・データマネジメント部門、行政機関等で幅広く活躍しています。今年度より古島大資先生が講師に昇任し教授と2人体制で、コロナ禍の中、学生と日々精力的に研究活動を行っています。

当研究室のポリシーは、薬学教育の中で重要な分野である新薬の臨床開発や臨床研究に必要な臨床研究方法論、生物統計学、疫学、EBM等の教育ならびに研究を実践することです。この様な理念を掲げた研究室は薬系大学では極めて珍しく、まさに時代に先駆けた研究室と言えます。

教育面では社会人にも門戸を広げた「CRC/CRA養成講座・創薬育薬基礎・応用特論」を毎年開講し社会的にも高く評価され、2007年から日本臨床薬理学会の認める「認定CRC更新のための講習会」に認定されています。またファルマバレーセンターと連携し、静岡県治験ネットワークの発展のためにCRCの養成や臨床試験実施体制の整備にも力を注いでいます。2010年には静岡県立総合病院内に当研究室の分室が開設され、データマネジメント・統計解析機能を有する分室として、医療機関・大学連携による臨

床研究の質を担保する拠点となることが期待されています。

研究面においては、静岡県立総合病院ほか、多くの医療福祉機関との連携で多施設共同研究、企業との共同研究等を実施しています。特に緑茶の感染症予防や認知機能への影響に関する臨床研究はマスコミでも大きく取り上げられています。

今年度末をもって17年間、研究室運営に尽力された山田浩教授が退官を予定しています。詳細については、今後ホームページなどに掲載される情報をご参照いただき奮ってご参加ください。



2021年3月19日 学位記授与式、卒業・修了生と学生たち

実践薬学分野

実践薬学分野は、6年制教育のスタートと共に誕生した研究室で、本年度創立14年目となりました。令和2年度は、研究室から新たに5名の博士が誕生しました。また2名の修士と5名の学士を送り出し、医療現場や企業の学士を送り出して、医療現場や企業の公的機関で活躍しています。新たに4年生7名が合流し、令和3年度は総勢25名の構成員で日々和気藹々と活動しております。

令和3年3月に、本研究室の初代教授である並木徳之教授が定年退職されました。本年2月20日に静岡県立大学で開催した最終講義では、「県大のBranding Designが、つくるSustainableな進歩を大切に！」のタイトルでお話頂きました。残念ながら対面での講義や祝賀会の開催はかたやありませんでしたが、Zoomを通して全国から大勢の皆様にご参加頂きました。

令和3年4月、内田信也先生が准教授から昇任し、教授として着任いたしました。これまで同様に「医療への直接の還元を意識した領域での研究」を旨とし、企業、病院、薬局や他大学と協力しながら「社会に開かれた実践的な研究」を推進しております。実践薬学分野は、患者ベネフィットを追求した臨床製剤及び薬物動態・薬力学解析のテーマを中心として、実践的な研究をさらにパワーアップして参ります。今年度も新型コロナウイルス感染症

の影響により、例年通りの活動が難しい状況におかれています。その中でも実践薬学の教員及び学生は、薬学会、医療薬学会、薬剤学会及び臨床薬理学会などで積極的に発表を行い、研究成果を発信しております。また研究室主催の実践薬学セミナーの開催（オンライン形式）を予定しております。

本研究室は皆、患者さんに優れた製剤と薬物治療を届けたいという目標を持ち、日々研究及び研鑽に励んでおります。これからも研究室一丸となって邁進して参りますので、暖かいご支援を賜りますよう、よろしくお願いたします。



2021年3月 学位記授与式

医薬品化学分野

医薬品化学研究室では、「安全かつ簡便な合成法を実現する化学」を主な目標として、いろいろな研究を行っています。これらの研究を通じてこれまでに、安全・簡便な化学合成を可能とする一酸化炭素代替化合物の開発や、二酸化硫黄代替化合物を用いる新規触媒反応の開発、位置選択的反応を実現する新規触媒の開発、等をはじめとする様々な成果を得てきました。今後、これまでの研究をさらに大きく発展させることができますよう頑張りたいと思っております。研究室員一同、化学の世界で大きく花開く成果をあげようと、日々研究に没頭しています。

この1年の間でのニュースとしては、小西英之博士が、2020年10月に講師から准教授に昇進しました。また、令和2年度の3年生6名が後期から卒研究生として仲間に加わってくれました。今後の活躍を楽しみにしています。

1研にある2台のドラフトチャンバーの調子が以前から悪く、たびたび修理していましたが、昨年度末に新しいものが導入されました。以前と比べると驚くほど綺麗ですが、いつまで綺麗のままか不安です。今年度は、それ以外のドラフト



ドラフトが一部新しくなりました

チャンバーも新しくしたいと密かに思っています。

昨年度から、新型コロナウイルスの感染防止のため、多くの活動が制限されており、研究室でも、これまで毎年行ってきた楽しい行事（年度末送別会、お花見、バーベキュー、研究室旅行など）が実施できない状態が続いています。研究室内のセミナーも、毎週遠隔システム（Zoom）を使用しているっており、随分と雰囲気が変わりました。このような状況でも研究室員たちは、研究を少しでも進めようと日々頑張っています。来年こそ良い年になりますように。

生命物理化学分野

8月中旬、停滞する前線の影響で断続的に激しい雨が続いています。静岡県でも新型コロナウイルス感染症の新規感染者の爆発的増加により、8日からまん延防止等重点措置が適用されました。さらに20日から緊急事態宣言の対象地域となることが決まり、未だにコロナ終息の兆しは見えません。今回も昨年10月からの研究室の状況について簡単にご報告いたします。

昨年からは3年次後期から学生が研究室に配属され、生命物理化学では7名の3年生（薬科学科3名、薬学科4名）が研究室に加わりました。感染防止対策と研究活動の両立に苦慮しましたが、無事に12月上旬、6名の薬学科6年生が卒業研究発表を行いました。

また、2月には2名の薬科学科4年生が卒業研究を発表し、1名の大学院生が修士論文発表を行いました。3月19日には、参加人数を大幅に制限することでグラントシップでの学位記授与式が開催されました。謝恩会や研究室ごとの送別会は開催できませんでしたが、学位記授与式が開催できたことは幸いでした。第106回薬剤師国家試験では、薬学科6年生は6名全員が合格することが出来ました。薬学部での学位記授与式では、薬学科6年生の石口晃平くんが成績優秀者賞を受賞し、博士前期課程2年生の玉舟亮太くんが領域別優秀者賞（分析物理領域）を受賞しまし

た。

さて年度が変わって4月、石川吉伸准教授が新設の湘南医療大学薬学部へ教授として転出されました。石川先生は当研究室の教育・研究、県大薬学部の物理化学教育を支えてきました。新設の薬学部において、更なるご活躍が期待されます。

ウィズコロナ下、会議や講義のオンライン化が加速しました。学会もオンライン開催やハイブリッド開催が普及しました。未だにコロナ終息の兆しは見えませんが、コロナ禍で私たちは多くのことを学びました。今後、アフターコロナ時代に大学はどう変わるのでしょうか。



静岡県立大学大学総合案内2021掲載写真（2020年10月29日）

医薬品創製化学分野

私たちの研究室は今年で9年目を迎えました。新型コロナウイルスが世界中で猛威を振り、大学生活はもちろん研究室活動にも依然として影響を与えております。そのような中でも、今できることを全力で取り組むという研究室の精神は変えず、みんなで前を向いて邁進しております。その甲斐もあって着実に研究成果を残しており、国際誌での論文発表に加え、遠隔形式が多いですが学会発表への参加も平常時に戻りつつあります。また、これまでの研究成果および今後の研究計画が高く評価され、現博士後期課程1年の小林史尚さん、廣川遼さんが奨学金を受賞しました。私たちは今後も新たなことに挑戦し続けて参りますので、ぜひその成果を当研究室のホームページよりご確認ください。

今年度の研究室配属はこれまでより早い時期（10月）に行われましたが、今回も優秀で有機化学が好きなやる気溢れる学生が6名加わってくれました。また、3年連続になります2名の女子学生も入ってくれて、さらに華やかで活気溢れる研究室になりました。「新しい化学の創製」と「新しい医薬分子の創製」を行う中で研究の楽しさを体感し、研究室をより一層盛り上げていってけると期待しています。今年6名が大学院入試に臨みますが、院試休み中の勉強の成果を当日の試験

につけると約束してくれました。学会やセミナー、その他の研究室イベントについても、昨年に引き続き殆どがオンライン開催となり、寂しい日々が続いております。しかし一方で、このような新様式の生活にも大分慣れ、オンラインの良い面も実感しています。コロナの終息はまだ先になりそうです。今後とも感染対策については十分留意しながら研究室活動を行って参ります。来年（2022年度）は10周年に当たります。コロナが終息していることを祈念しつつ、卒業生の皆さまと会えることを楽しみにしています。



2021年3月19日 学位記授与式

統合生理学分野

統合生理学分野では、2021年4月、原雄二教授が京都大学より着任し、教員3名、博士課程2名、修士課程6名、学部生13名のメンバーで、新たな研究室体制をスタートしております。そこで、昨年10月からの研究室の様子を簡単ですがご報告させていただきます。

2021年3月をもちまして、2012年より当研究室の教授として活躍された武田厚司先生が御定年退職されました。昨年度は、国内外の学会に満足に参加することは出来ませんでした。11月には武田先生の主催で、静岡県立大学にてハイブリット形式により日本微量元素学会学術集会を開催することができました。当学会では、今春卒業した佐伯奈々さん、所春奈さん、待寺りさ子さん、当時5年生の片平実沙さんが優秀学生賞を受賞しました。また、3月にオンライン開催された日本薬学会では、当時5年生の村上大地さんが学生優秀発表賞を受賞しました。武田先生退官祝賀会は、新型コロナウイルスの影響により延期致しましたが、2月には、最終講義を盛況に開催することが出来ました。同窓生の皆様にはオンライン開催のご案内のみに留まっておりますが、ご参加いただき大変ありがとうございました。

そして、2021年4月より統合生理学は、原教授を中心として、「神経・筋疾患の発症機構の解明および治

療法の開発」をメインテーマとし、健康長寿の実現に向け、研究を進めています（詳細は、原教授の教授就任挨拶のページやリニューアルした研究室HP (<https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/physiol/>)も併せてご覧ください)。研究室のセッティング等で、ドタバタする日々が続いておりますが、研究室一丸となつて、大きな成果を上げるべく、日々精進していきたいと考えております。今後とも皆様からのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

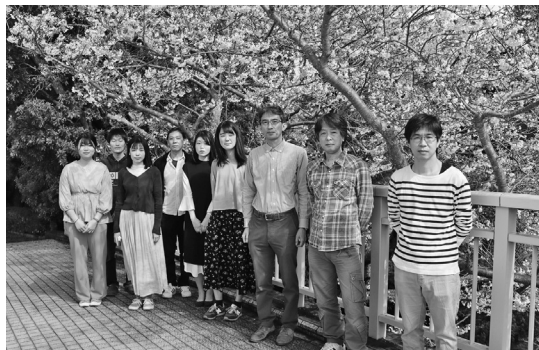


2021年4月 モニュメント下にて

免疫微生物学分野

令和二年四月より、梅本英司教授が着任し、「生体環境を重視した免疫学」をテーマに研究を進めています。腸内細菌や食事などの環境因子に絶えず晒される腸管では、病原体を排除しつつ常在細菌に過剰に反応しないための独自の免疫制御機構が発達しています。当研究室では主に粘膜組織における免疫細胞の機能や、常在細菌や病原性細菌により産生される代謝分子が免疫系に与える影響を研究しています。リニューアルされた研究室ホームページでも紹介しておりますので、是非一度ご覧下さい。(https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/immunol/)

現在、研究室では4年生6名、5年生5名、6年生5名、修士1年生1名の計17名の学生が所属し、研究に打ち込んでいます。中



国から研究生が参画する予定でしたが、残念ながらコロナ禍のため来日できていません。一日でも早く、全員が揃って研究室で過ごせる日が来ることを楽しみにしております。令和二年度は、当研究室からは6名の学生が薬学科(6

年制)を卒業し、病院、薬局、ドラッグストア、医薬品医療機器総合機構(PMDA)に就職しました。卒業生の皆様のこれからの益々の活躍を祈念いたします。

令和二年三月に定年退職された今井先生は、副学長として引き続き本学の発展にご尽力されております。大学においでの際には、是非お訪ね下さい。尚、コロナの影響により延期となっておりました最終講義は、動画配信を予定しております。追って同窓生の皆様には視聴方法をお知らせいたしますので、静岡県立大学薬学部ホームページにてご確認いただければ幸いです。

コロナ禍で困難な状況ではありませんが、研究室メンバー全員で乗り越えられるよう日々奮闘しております。同窓生の皆様には、引き続きご指導ご鞭撻のほど、よろしく御願いたします。

創薬探索センター

現代のがん治療を目的とした創薬では、新しい知識や仮説をもとにした分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬が次々に開発されています。しかし、その福音は一部のがん種に限定されており、多くの未解決セグメントを残しています。当研究室は2004年に開設されて以来、静岡県ファルマバレーセンターとの連携のもと、国内研究機関や製薬企業と共同で新しい抗がん剤シーズの探索研究を進めています。これまで転写制御因子STAT3を標的とした新規抗がん剤候補物質の創出に成功しました。既に欧米アジアなど各国で特許登録され、国内製薬企業で臨床試験に向けた評価が進められています。さらに、従来の抗がん剤のようにがん細胞自体を攻撃するのではなく、生体にもともと備わる免疫細胞の力を活用する薬剤の開発を進めています。がんが高発現しているトリプトファン代謝に関わる酵素を標的としたユニークな化合物を複数発見しており、現在インシリコモデルを活用した構造最適化および動物モデルでの詳細な解析を進めています。また、企業と共同で免疫系に作用するCOVID-19治療薬の研究にも取り組んでいます。当研究室では化学をベースにして、腫瘍学や免疫学について学生と共に学び理解を深めることにより、がんや感染症のアクセラレーターを狙った新薬シーズの研究開発に

取り組んでいます。有効な治療法の確立されない疾患で苦しむ方々の「HOPE & HELP」を目指します。令和二年度には、博士前期課程1年市田泰輝さんが、日本薬学会第141年会にて、学生優秀発表賞を受賞しました。研究題目は「STLC誘導体を有する新規ADCの設計と合成」です。また博士2名、薬学科6年生4名、薬学科4年生1名が修了/卒業しました。現在彼らは製薬関連企業の研究職(協和キリン)や開発職(大日本住友製薬)、情報技術者(アマゾンウェブサービス)、薬剤師(静岡済生会病院、静岡市立清水病院)として活躍中です。



2020年12月14日 静岡県立大学草薙キャンパスにて

薬学キャリアデザイン 近藤寄附講座

当寄附講座は静岡薬科大学卒業生（46年卒）近藤隆様からの寄附金によって運営されており、開設3年目を迎えました。メインスタッフは木下俊也客員教授と南彰客員講師（兼任）の二人です。

当寄附講座は、学生の将来進路に対する意識付けや薬学に対するモチベーションの熟成を目的として活動しており、①各分野で活躍する卒業生等による講義、②国内外の医療介護分野の実態調査及び卒業生の活動状況の調査、③就職等の相談、④国内外の短期留学・研修を希望する学生への学術研究支援等を行っています。

開設初年度は、卒業生による講義、進路相談会、学術研究支援（学会発表や短期留学等の旅費支援）等、多くの学生支援を実施することができました。しかし、2年目の昨年度、3年目の本年度においては、新型コロナウイルス感染症拡大という異常事態のため、学生との対面機会を設けることは難しく、卒業生による講義は全てがZoomを用いた遠隔形式講義となりました。当寄附講座が担当する「薬学概論」・「調剤学」・「薬学と社会」では、製薬企業、



寄附講座のスタッフ 南彰客員講師（左側）と木下俊也客員教授（右側）

化粧品企業、薬局、病院、薬事行政等、各界で活躍する卒業生延べ13名を講師として招聘し、実際の仕事内容や自らの体験談といった生の声をまじえ講義を行っていただきました。一方、進路相談会および学術研究支援は、昨年度に引き続き全面的に見送ることになりましたが、この感染症が落ち着いた段階で再開できるよう準備をすすめております。

卒業生の皆様には今後とも変わらぬご支援をよろしくお願いいたします。

薬学部教員の人事異動

退職

生化学分野	教授	鈴木 隆	令和3年3月
統合生理学分野	教授	武田 厚司	令和3年3月
実践薬学分野	教授	並木 徳之	令和3年3月
生命物理化学分野	准教授	石川 吉伸	令和3年3月
生体情報分子解析学分野	講師	山崎 泰広	令和3年3月
医薬品製造化学分野	教授	菅 敏幸	令和3年7月
分子病態化学分野	助教	宮崎 雄輔	令和3年7月

着任

薬剤学分野	助教	山田 幸平	令和2年10月
生化学分野	教授	竹内 英之	令和3年4月
統合生理学分野	教授	原 雄二	令和3年4月
創薬探索センター	助教	村上 央	令和3年4月

昇任

医薬品化学分野	准教授	小西 英之	令和2年10月
医薬品創製化学分野	准教授	江上 寛通	令和2年10月
実践薬学分野	教授	内田 信也	令和3年4月
医薬品情報解析学分野	講師	古島 大資	令和3年4月

科学英語分野

准教授 ホーク フィリップ (Philip Hawke)

As both the world of science and Japanese society are becoming more and more internationalized, English is increasingly needed both by Japanese pharmaceutical scientists to communicate their research to foreign colleagues, and by Japanese pharmacists to speak to foreign patients and customers. These trends were recognized by the University of Shizuoka in 2007 when it established the Scientific English Program to train science graduate students as part of the Global COE Program. The Program was integrated into the School of Pharmaceutical Sciences as the 科学英語分野 in 2012, when it began providing courses to undergraduate students as well. The Program is taught by me, Philip Hawke, a Canadian who has taught at the University of Shizuoka since 1998.

The Program teaches graduate students the practical English skills that they need to successfully communicate about their research. It offers courses in **Academic Presentations, Academic Writing, Scientific Manuscript Editing, Oral Communication, Small Group Discussion, and Independent Listening**. After taking the Program's courses, many students have presented their work at international conferences and published it in international journals, and some have worked abroad as post-doctoral fellows or now work for international drug companies.

The Program teaches undergraduate students more basic English skills related to science. The **Pharmaceutical Science English** course introduces third-year students to the English that they will need after entering laboratories in their fourth year, such reading scientific journal articles. Students also develop practical English for communicating with foreign patients and customers in hospitals and drug stores. In the English section of the **Scientific Practice** course, first-year students have debates on scientific topics. In 2017, a new course called **Research Presentations in English** was introduced. The course gives 4th-, 5th-, and 6th-year students the opportunity to practice presenting their graduation research projects in English.

In recent years, an increasing number of foreign graduate students have been enrolling in the School, motivating faculty members to improve their own English skills. To help them do so, the Program offers weekly English Lunches for Science Faculty Members at a variety of skill levels. The Scientific English Program aims to help both students and faculty members to develop the English skills that they need to succeed as scientific research and Japanese society become increasingly internationalized.



Discussing research in Small Group Discussion class.

科学の発展や日本社会の国際化に伴って、日本の薬学研究者や薬剤師が外国人の研究者、患者、来店客と英語でコミュニケーションをとる必要性が増えています。こうした傾向を背景に、静岡県立大学で2007年にグローバルCOEプログラムの一環として科学系大学院生のためのScientific English Programが設立され、授業が行われてきました。2012年からは、このプログラムが薬学部の「科学英語分野」として統合され、同時に学部生に対しても授業が行われるようになりました。1998年より「科学英語分野」は私、カナダ出身のホークフィリップが担当しております。

大学院生を対象としたプログラムでは、研究について円滑なコミュニケーションを図ることを目的として、大学院生を対象に英語の実用的なスキルを磨くための授業を行っています。このコースではアカデミックプレゼンテーション、アカデミックライティング、科学原稿、オーラルコミュニケーション、スモールグループディスカッション、また自主的に行うリスニングなどのコースを提供しています。プログラム受講後は多くの学生が、国際会議での発表、国際学術雑誌への論文掲載、またポストドクターの一員として海外の大学で研究を行ったり、国際的な製薬会社に勤務するなど、多彩な経験を積んでいます。

学部生を対象としたプログラムでは、科学に関連した基礎的な英語を学ぶことができます。Pharmaceutical Science Englishでは学部3年生に対して、4年生になり研究室に配属されたのちに必要となる、科学に関連した英文記事を読むためのスキルを身につけるコースを用意しています。さらに学生は、病院や薬局で外国人の患者とのコミュニケーションを図るための実用的な英語を身につけます。Scientific Practice コースでは1年生が科学のトピックについて英語で討論を行っています。2017年にはResearch Presentations in Englishという新しいコースが設置され、4、5、6年生が卒業研究発表を英語で行う練習を行っています。

近年、海外から多くの大学院生が入学するようになり、教職員の英語スキルについても向上させる必要があります。その一助として、週に一度さまざまな英語レベルの科学系教職員が参加できるイングリッシュランチの機会を提供しています。科学英語プログラムは、学生、教職員双方が研究を成功させるため、また今後ますます国際化が進む日本で必要とされる英語のスキルを高めるための手助けをすることを目指しています。

新型コロナウイルスワクチンの 職域接種への薬学部教員の協力

日本だけでなく全世界で新型コロナウイルス (SARS-CoV-2) がまだまだ猛威を振るっています。現在、感染症対策の有効な手段として、新型コロナウイルスワクチン接種が進められています。

静岡県でも集団接種会場が設置され、また静岡県立大学でも職域接種が実施されています。

薬剤師免許をもつ薬学部の教員がワクチン接種に協力する為、ワクチンの充填作業に向けた研修会が開かれました。普段から研究で注射筒への充填を行っている教員も多いのですが、ヒトに接種するワクチンの充填作業に従事することから、改めて気を引き締めて研修を行いました。作業環境のアルコール消毒、注射筒の準備、バイアル内に異物が混入していないか確認、充填作業といった流れを何度も繰り返し練習を行い、ワクチン接種に向けて万全の態勢を整えました。

た。

静岡県立大学での職域接種は9月上旬から始まりました。そこで多くの薬学部教員がワクチン充填に従事し、職域接種の円滑な実施に協力することが出来ました。9月下旬には2回目のワクチン職域接種が実施されます。引き続き新型コロナウイルス接種の円滑な実施に協力していきたいと思えます。



ワクチン充填作業



ワクチン充填作業の練習風景



ワクチン充填作業の練習風景



ワクチン充填作業



ワクチン充填作業



ワクチンを充填する賀川薬学部長

薬学部令和2年度成績優秀者賞・岩崎賞受賞

薬学科 成績優秀者賞



大学生活と学び

株式会社レーベンプラン

石口 晃平

(薬学科 生命物理化学分野 令和3年卒)

この度は成績優秀者賞という名誉ある賞を頂き大変光栄に思います。今回の受賞は、友人や先生方、生活を支えてくれた家族のお蔭です。この場を借りて感謝申し上げます。

静岡県立大学での6年間を振り返ると、のんびりと楽しく過ごすことができていたという印象です。毎日当然のように友人と会えていたことは精神的に良好な状態を維持することに大きく寄与していました。また、時間的余裕があり、好きな時に好きなことを学ぶことができました。これは一般的に言われる「学生の本分は勉強」という言葉と照らし合わせて考えると、社会的に学生に求められていることを、肉体的及び精神的な負担なく、こなせていたと言えます。社会的にも良好な状態を維持できていました。おおよそ「健康」でした。

前段の文章はWHO憲章における健康の定義を思い浮かべながら書きまし

*薬学部学位記伝達式にて優秀な成績を修めた5名の学生にそれぞれ「成績優秀者賞」「岩崎賞」が贈られ、静薬学友会からは副賞として記念品を贈呈しました。
なお、薬学科 岩崎賞受賞者 木村朋起さんには、ホームページで執筆頂いています。

薬科学科 成績優秀者賞



4年間の大学生活を振り返って

博士前期課程1年 医薬生命化学講座

龍 聡平

(薬化学科 医薬生命化学分野 令和3年卒)

この度は、成績優秀者賞という名誉ある賞をいただき、誠に光栄に思います。本賞の受賞は、切磋琢磨し合いながら共に勉学に励んだ学友、懇切丁寧に薬学をご教授いただいた先生方、並びに暖かく私を支えてくれた家族無くしては、達成することは叶いませんでした。この場をお借りして、ご支援いただいたすべての方々へ厚く御礼申し上げます。

さて、私の静岡県立大学薬学部での学業の日々を振り返ってみると、低年次には化学、生物学、物理学の基礎を幅広く学び、高年次には薬理学や創剤工学に代表される薬学の応用を学んできました。基礎を幅広く学ぶことは、是が非でも多くのことを学ぶ必要があるため、当時は四苦八苦しながら勉学に励んできました。高年次に進み、基礎を体系的に築いた上で、応用を学んだとき、基礎の一つ一つが応用につな

がっていることを感じ、大変痛快に思いました。そのような体験から、製剤研究のアプローチから、偉大な先人が築いてきたような応用研究を行なっていくたいと思い、静岡県立大学を卒業後、本学大学院へと進学し、医薬生命化学教室にて薬物送達に関する研究を行なっています。実際のところ、研究活動はうまくいかないことの連続ですが、その中で試行錯誤を繰り返し、新たな成果が得られると、格別の喜びがあります。先生方や研究室のメンバーからご鞭撻や刺激を受けながら、これからも大学院での研究に精を出していく所存です。

最後に、本学で得た物事を学ぶ姿勢を忘れずに、日々スキルアップできるように、努力を重ねていきたいです。また、本賞を頂けたことを自信にして、生涯にわたって常に研鑽して参ります。

薬学科 岩崎賞



ご支援いただいた全ての方々へのお礼と近況報告

第一三共ヘルスケア株式会社 研究開発部

鈴木 木 ひかる

(薬学科 医薬生命化学分野 令和3年卒)

この度は、岩崎賞という歴史ある賞を賜り、大変嬉しく思います。今回の受賞は、温かくご指導くださった先生方や共に高め合ってきた友人、常に私を応援してくれた家族など多くの方々の支えのおかげであり、この場を借りて感謝申し上げます。

私は現在、製薬会社において一般用医薬品や化粧品等の研究開発に携わっております。まだ社会人として歩き出したばかりですが、大学で得た知識や経験が活かされていると感じる機会も多く、今回はその中の三つを挙げさせていただきます。

一つ目は、基礎から専門領域に及ぶ薬学の知識です。幅広い分野を扱う会社の為、製品開発には様々な知識が求められます。その中で、新たに得た知識と大学での知識が繋がることで、理解をより深めることが出来ています。今後も、この知識の輪は広がっていくと思います。二つ目は、実務実習の

経験です。実務実習の際に、人々のセルフメディケーションへの関心の高さを目の当たりにしたことは、私が現在の職業を選択するきっかけとなりました。また、実務実習では薬剤師や患者の視点を得ることができました。そのような視点は、製品を創り出す上で+αの価値創出に繋がると感じております。三つ目は、「なぜ」を考える力です。研究活動の中で、なぜこの操作を行うのか、なぜこのような結果が出たのか等を考えることで、操作の意義や新たな発見を学び得てきました。仕事においても「なぜ」を考えることで、

一つひとつの仕事の意義や新たな発見を学び得ております。私はまだまだ未熟者ですが、今後も大学での知識や経験を活かして更なる成長を続けることで、人々に健康と笑顔を届ける製品の創出に貢献できるように精進してまいります。

現在、同大学大学院へと進学し、

薬科学科 岩崎賞



大学生生活を振り返って

博士前期課程1年 医薬生命化学講座

齋藤 鉄三郎

(薬科学科 医薬生命化学分野 令和3年卒)

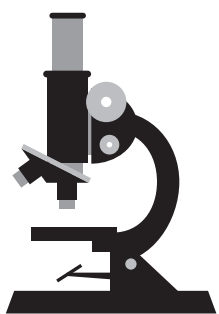
この度は岩崎賞という栄えある賞を賜ることができ、大変光栄に思います。今回の受賞は、ご指導くださった先生方や共に学業に励んだ友人たち、そしてどんな時も支えてくれた家族のおかげだと思っております。この場をお借りして感謝申し上げます。

そもそも、なぜ薬学を志したのか考えると、それは高校時代に理由があったように感じます。自分自身もともと埼玉県の生まれであり、大学に入学するまでは埼玉で過ごしておりました。そんな中、高校で学んだ化学が面白く、興味が湧いたことを覚えています。また、病気を治療する医薬品にも関心があつたことから薬学部を志望しました。その後、静岡県立大学に入学し、たくさんの人と出会ったことで自分の視野が広がったように感じております。そういう方々に、改めて感謝申し上げます。

現在、同大学大学院へと進学し、

医薬生命化学教室にて研究室生活を送っております。実験に関しては、うまくいかずに気持ちが萎えてしまう日々も多いですが、そういった問題に適切に対処し、薬学の新たな発見に貢献できたかと考えております。また、研究室に所属して2年目になるので、先輩としての自覚を持ちつつ、物事に取り組んでいきたいと思っております。

最後になりますが、今後は岩崎賞を励みとして、研究室での活動に精進して参りたく思います。そして、これまで支えてくださった方々に報いることを目標とし、日々努力し成長していきたいと思っております。



在学生だより

挑戦

熊谷拓也

(薬科学科1年)

今期の代議員を務めさせて頂き、よろしく願います。

先日は学友会総会に参加させて頂き、自分の知識不足を実感しました。また前期の授業では薬の勉強するための基礎を学んでいたため専門的に薬を学ぶことが少なかったためより興味を持たせていただきました。薬の勉強をするために今の勉強をしっかりとするのが大事だと実感しました。

話は変わりますが、私は現在様々なことに挑戦しています。直近では、自転車です。京都まで行きました。サイクリングをすることが好きであり、また夏休みという時間で時間に余裕があるので大まかな計画を立てて出発しました。最初は、300キロという想像もできない距離をみて途中でリタイアしてしまうのではないかと思いましたが変わっていく風景を楽しみながら走って行くのと少しずつ進んでいく距離も苦に感じることが少なく、いつの間にか長い距離を進み、目的地に徐々に近づきました。また、いままで県境を越える距離の移動や連日走った経験がなく不安

なことが多いなかの挑戦でしたが無事三日かけて到着することができました。この経験はとても達成感を感じました。次は九州か東北の方まで行こうと思います。

今回のサイクリングを通して、たとえ想像上では無謀な挑戦でも意外と達成することができ、大きなことでも小さいことの積み重ねで達成することができると感じました。

次に挑戦してみようと思うことはスキューバダイビングライセンスをとることです。この目標を達成することには様々な困難があると思いますが乗り越えられるように努力していこうと思います。



コロナ禍の大学生活

山田遥香

(薬学科2年)

静岡県立大学に入学してから約一年半が経ちました。新型コロナウイルスの影響により、対面か遠隔形式にて講義が行われています。昨年度は週二回しか登校しておらず、不安を感じることもありました。しかし、講義でわからないところがあったときは先生がメールで対応してくださり、丁寧に教えてくださいました。オンデマンド形式の講義は何度も動画を視聴したり巻き戻したりすることができ、理解も深まりました。また、通学時間がない分、自分の時間が増えたため、資格の勉強など新しいことに挑戦することができました。このように、遠隔講義だからこそその利点もありました。二年生になると、実習が始まりました。

実習が始まったことで、大学に通うことが増え、多くの学生と話す機会が増えました。実験結果についてグループで話していたとき、自分には思いつかなかった考察がたくさん出てきました。さまざまな視点からの物の見方や考え方を学ぶことができました。また、自分の知識不足を感じる場面もあり、とても刺激を受けました。これは、対面で行うからこそ得られたことだと思います。これからは真剣に実習に取り組

み、実験操作や知識を学ぶのはもちろんのこと、周りの学生から得られることも大切にしていきたいです。新型コロナウイルスの影響で、一年遅れの入学式が今年四月に行われました。入学してから一年が経過していましたが、改めて静岡県立大学に入学したことを実感し、気を引き締める良い機会になりました。

現在のような状況がいつまで続くかはわかりません。それでも、この大学で出会えた友人を大切に、残り四年半、後悔のないよう過ごしていきたいです。



友人とともに 右が本人

楽しむことの大切さ

私が医薬生命化学教室に配属され、もうすぐ1年が過ぎようとしています。研究室生活はとても大変でしたが、楽しいことも沢山あり、また自分の課題について見直す良いきっかけを与えてくれたように思います。

静岡県立大学に入るまで、私は将棋の棋士になるために奨励会という棋士養成機関に通っていました。19歳まで奨励会を経験し、三段まで行きました。現在では退会してアマチュアとして将棋に関わっています。奨励会を退会した人は将棋を辞める人も多いですが、自分は将棋が好きで気持ちは残っていたので、趣味として続けることにしました。大会に出る他、静岡で将棋関係の仕事をしていただく機会もあり、子供たちに指導をしたり、将棋ファンの方と将棋盤を囲んだりしている時間はとても充実しています。

今年の3月に、朝日アマ将棋名人戦という大会で優勝させてもらいました。優勝できる実力があつたとは思えませんが、純粹に将棋を楽しみながら指せたことが勝因だったかもしれません。どの将棋もギリギリで大変でしたが、久々にいい将棋を指すことの楽しさを思い出しました。また、前回優勝者と

山岸 亮 平

(薬科学科4年)

の三番勝負やプロの公式戦への出場など、貴重な経験もさせていただき、とても充実した時間を過ごすことができました。

近年、AIの発展により将棋界は急激な発展を遂げています。将棋の定跡は一新され、棋士やアマチュアのレベルは格段に進歩しました。また、AIによる形勢判断が見られるようになったことで、将棋を知らない人でも中継を見て楽しむことができるようになりました。今後、AIを活用することで、藤井さんに並ぶような新しいタイプの天才がたくさん登場してくると思います。静岡からも、そういった子が出てきてくれたらいいなと思います。これから将棋界がどう発展していくのか、とても楽しみです。



第3回静岡県立大学内西いよ子奨学金授与式

令和3年8月16日(月)に、第3回静岡県立大学内西いよ子奨学金授与式が開催されました。今年度は、3名が奨学生として採用され、尾池和夫学長より認定書が授与されました。

内西いよ子様は、1947年静岡県立大学の前身である静岡女子薬学校を卒業後、薬剤師として勤務され、2018年に90歳で生涯を閉じられました。御

遺言の中で、薬剤師として働いたことが人生の支えになったことから、母校の薬学生のために役立てて欲しいという思いがあり、ご親族を介して遺産の1億5300万円余りを静岡県立大学におおぞら基金に寄附されました。おおぞら基金は静岡県立大学が設立した外部からの寄付金の管理を行う基金です。内西様の薬学生のためにという御遺志に基づき、おおぞら基金の中で特定基金「内西いよ子基金」が設立されました。

「内西いよ子基金」は、静岡県立大学薬学部及び静岡県立大学大学院薬食生命科学総合学府(薬学系)の学生の教育・研究に対する支援を目的としています。この基金をもとに、令和元年度より「静岡県立大学内西いよ子奨学金」が設立されており、大学院生を対象に研究活動の支援を目的として奨学金を授与しています。



中野眞汎先生を偲んで



中野眞汎先生

薬学部長・臨床薬剤学分野教授

賀川義之

(昭和58年卒)

中野眞汎先生が、2019年11月14日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。中野先生は2016年頃までは研究室の行事にも参加され、お元氣な姿を拝見していました。ただ、2018年にお目にかかった際には歩行に付き添いが必要なくらいの状態でしたので、体調を心配しておりました。

中野先生は、静岡県のご出身で1960年に京都大学医学部薬学科をご卒業された後、修士課程に進み、修了後に渡米され、米国ウイスコンシン大学で薬学博士を取得されました。その後、京都大学薬学部助手、

カナダアルバータ大学薬学部、カナダ政府厚生省食品医薬品政庁薬化学研究所、米国アルザ薬化学研究所、北海道大学薬学部助教を経て、1980年に熊本大学医学部附属病院教授・薬剤部長に就任されました。中野先生のご専門は薬剤学で、物理系薬剤学から生物系薬剤学、臨床薬剤学と幅広く、広範な領域で顕著な業績を残されました。学会活動では日本TDM学会理事長、日本臨床薬理学会年会長、医療薬学フォーラム実行委員長、日本小児臨床薬理学会年会長などの要職を歴任されました。著書では、薬剤学の教科書をはじめ、ドラッグデリバリーシステム、薬物代謝、臨床薬理に関する著書を執筆され、2000年以降は特に治験関

係の著書を多く執筆されました。受賞関係では、日本病院薬剤師会病院薬学賞、日本薬剤学会賞などを受賞されています。静岡県関係では、静岡県治験ネットワークなど、治験に関する指導者として貢献されました。中野先生は、熊本大学医学部附属病院薬剤部長・教授としての臨床研究および教育経験が評価され、2002年4月に本学に赴任され、2005年3月まで大学院に開設された臨床薬剤学講座の初代教授を務められました。当時は薬学教育6年制の開始を控え、臨床薬学教育の重要性が脚光を浴びている時期で、本学の博士前期課程に臨床コースが設置され、その総括責任者として尽力されました。臨床コースでは、大学院1年生の後期から1年以上に及ぶ長期間の病院研修と臨床薬剤師業務の中で研究テーマを見出し修士論文として完成させる、意欲的なカリキュラムでした。静岡県立総合病院内に臨床薬学教育の拠点としてブラ

ンチ研究室を開設し、現行の薬学教育6年制に比べても臨床での実習期間が大幅に長く、参加型で研究志向の強い臨床教育が学内外で高く評価されました。臨床コースには、本学出身者以外に全国の大学から臨床薬学を学ぶための意志と意欲をもった学生が多く入学し、修士号を取得しました。このように中野先生は本学の現在に至る臨床教育の礎を築かれた方です。

私は2005年4月に中野先生の後任として本学に赴任しました。私の本学赴任後も中野先生には多岐に渡り研究室運営にご指導・ご支援を賜り、教育・研究面でのご指導に加え、研究室の歓迎会、忘年会、ボーリング大会、ソフトボール大会にも参加していただき、先生の気さくな人柄と相俟って研究室の雰囲気をもたげていただきました。

中野先生のこれまでのご功績を称え、後進の我々は先生のご功績をさらに発展させ、我が国の臨床薬学を牽引できる人材を数多く輩出できるように日々努力しています。

富田多嘉子先生のご逝去を悼んで



富田多嘉子 先生

昭和女子大学食健康科学部教授

梅垣敬三

(昭和55年卒)

中・高校校長などを歴任、県選挙管理委員会委員長、静岡新聞社「読者と報道委員会」委員を務められ、

2012年には選挙管理事務・教育研究功労で瑞宝賞を受賞

富田多嘉子先生が令和2年4月4日に84歳で逝去されました。コロナ禍であったことから、私を含めて先生のご指導を受けた方ほとんどは、葬儀等にも参列できず詳細を知ることができなかつたものと推察します。富田先生は、大学を定年退官された後も様々なところで活躍されていたことから、訃報が新聞に掲載されています。その内容の抜粋は次の通りです。〃県立大名誉教授 元静岡英和女学院理事長、4日午前9時6分、乳がんのため死去。葬儀は6日日本福音ルーテル静岡協会光礼拝所。県立大教授、静岡英和女学院

先生は大阪府生まれで、大阪大学大学院薬学部研究科を出られて、米国アイオワ州立大学、ニューヨーク州立大学に留学され、1967年から静岡薬科大学薬理学教室の助手、講師、助教授、県立大学の教授を歴任されました。私が先生のご指導を受けたのは、1989年の薬理学教室4年生から、同大学院の修士課程から博士課程の6年間でした。先生はとても勉強熱心な方で、特に大学院在学中には世の中で注目されている新しい文献情報などを踏まえてご

指導いただきました。私の大学院の研究テーマであった高血圧ラットと血小板に関する研究では、イノシトールリン脂質の代謝回転とジアシルグリセロールによるプロテインキナーゼCが話題になり始めた頃でした。その最先端の研究をされていた神戸大学医学部の西塚先生の研究室に国内留学をする機会を与えていただいたことは、何より貴重な経験となりました。

先生はとても面倒見の良い方で、指導された学生の卒業後の状況も心配されていた話が、今も思い出されます。私の場合、大学院在籍中に経済的に困っていた時には家庭教師のあっせん、考えてもいなかった米国への留学の機会も与えていただきました。私の前職の国立健康・栄養研究所への就職ではかなりご尽力いただきました。これは私が大学院在学中に貸与をうけた奨学金がかなりの額になっていたため、米国留学中に奨学金の免除職に就きたいと先生にお願いしたことが関係しています。そのおかげで、研究所に60歳の定年

まで無事勤めることが出来ました。私が現在所属している昭和女子大学は、女性の活躍に力を注いでいます。それは女性が子育てをしながら働くことが改善されつつありますが、まだまだ難しい状況だからです。私が富田先生のご指導を受けていた時代は、女性が働くのは今とは比較できない大変な環境であったと思います。そのような環境で、先生は教育だけでなく一線級の研究者として、英文の研究論文を精力的に発表されていきました。とてもご苦労されていたのだと今更ながら感じています。私は県立大に用事があって静岡に行くことがあり、時々先生のご自宅を訪ねることがありました。その際には、いつも先生とご主人の勲先生のお二人から新しい科学研究の動向などをご教授いただきました。実はそれが私の静岡に行く楽しみの一つになっていました。それがもう叶わなくなったことはとても寂しく残念です。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

薬学部教室名および教員一覧 (カッコ内は大学院薬学研究院)

薬学科			臨床薬学大講座		
生体機能薬学大講座			臨床薬剤学分野 (臨床薬剤学講座)	教授	賀川 義之
生化学分野 (生化学講座)	教授	竹内 英之		准教授	宮崎 靖則
	准教授	高橋 忠伸		講師	内野 智信
	講師	南 彰		講師	大澤 隆志
衛生分子毒性学分野 (衛生分子毒性学講座)	助教	紅林 佑希	臨床薬効解析学分野 (臨床薬効解析学講座)	教授	伊藤 邦彦
	教授	吉成 浩一		准教授	井上 和幸
	講師	菅野 裕一郎		講師	辻 大樹
	助教	保坂 卓臣	講師	平井 啓太	
薬理学分野 (薬理学講座)	教授	石川 智久	医薬品情報解析学分野 (医薬品情報解析学講座)	教授	山田 浩
	准教授	木村 俊秀	実践薬学分野 (実践薬学講座)	講師	古島 大資
	講師	金子 雪子		教授	内田 信也
助教	山口 桃生	講師		柏倉 康治	
医薬生命化学分野 (医薬生命化学講座)	教授	浅井 知浩	実薬局管理学分野 (臨床薬剤学講座)	助教	田中 紫茉莉
	講師	米澤 正		助教	谷澤 康玄
	講師	小出 裕之		薬科学科	
	助教	宋 復燃	創薬科学大講座		
身体運動科学分野	准教授	窪田 辰政	医薬品化学分野 (薬化学講座)	教授	眞鍋 敬
科学英語分野	准教授	ホーク フィリップ (Philip HAWKE)		准教授	小西 英之
				講師	岩本 憲人
分子薬学大講座			助教	山口 深雪	
生体機能分子分析学分野 (生体機能分子分析学講座)	教授	轟木 堅一郎	生命物理化学分野 (生命物理化学講座)	教授	橋本 博
	准教授	水野 初		講師	原 幸大
	助教	杉山 栄二		助教	菱木 麻美
医薬品製造化学分野 (医薬品製造化学講座)	教授	菅 敏幸	医薬品創製化学分野 (医薬品創製化学講座)	教授	濱島 義隆
	准教授	吉村 文彦		准教授	江上 寛通
	講師	稲井 誠		助教	山下 賢二
	助教	大内 仁志	生命薬科学大講座		
生薬学分野 (生薬学講座)	教授	渡辺 賢二	統合生理学分野 (統合生理学講座)	教授	原 雄二
	講師	恒松 雄太		講師	井口 和明
	講師	佐藤 道大		助教	鈴木 美希
	助教	岸本 真治	免疫微生物学分野 (免疫微生物学講座)	教授	梅本 英司
医療薬学大講座				講師	三宅 正紀
薬剤学分野 (薬剤学講座)	教授	尾上 誠良		講師	黒羽子 孝太
	准教授	佐藤 秀行		助教	中西 勝宏
	助教	山田 幸平	大学院付属施設		
創剤科学分野 (創剤工学講座)	教授	近藤 啓	創薬探索センター	教授	浅井 章良
	准教授	金沢 貴憲		准教授	澤田 潤一
	助教	照喜名 孝之		講師	小郷 尚久
分子病態学分野 (分子病態学講座)	教授	森本 達也	薬食研究推進センター	助教	村上 央
	講師	刀坂 泰史		センター長・特任教授	山田 静雄
	助教	砂川 陽一		講師	伊藤 由彦
生体情報分子解析学分野 (生体情報分子解析学講座)	教授	黒川 洵子	寄附講座		
	准教授	坂本 多穂	薬学キャリアデザイン近藤寄附講座	客員教授	木下俊也
	助教	山口 賢彦		講師	南 彰 (兼務)

本部だより

一般社団法人静薬学友会 令和2年度第2回理事会報告

日時：令和2年9月12日（土曜日） 15：00～17：00

コロナの収束の用途がたないため、一堂に会する会合は取りやめ、代わってZoomを用いたオンライン会合により開催した。

出席者：理事13名、監事2名

安倍道治、高橋千恵子、賀川義之、浅井知浩、岩崎年史、大澤勝一、岡野幸次、木下俊也、清水広介、仲谷博明、永吉翼、前田徹、南彰（以上理事）

伊藤由彦、若林敬二（以上監事）

事務局 鈴木いずみ

欠席者：理事6名

秋山欣三、大木明代、黒羽子孝太、近藤隆、鈴木隆、渡邊学（敬称略）
出席理事は19名中13名で、定款第37条に基づき理事会は成立することが確認された。

議題

【審議事項】

1. 顧問の就任について

安倍会長より説明

横倉前会長と木苗前理事には引き続き今後の学友会の発展に協力していただきたいと考え顧問という役職への就任を提案したい。

全会一致で承認された。

2. 代議員の交代について

綿野尚幸さんから内田貴啓さんへの交代について、全会一致で承認された。

3. 委員会の担当について

各委員の配置案について安倍会長から説明があり全会一致で承認された。

4. 会員の連絡先について

安倍会長より説明。

・会員の直近の連絡先の把握や会費の納入率の向上、会報の受領の確認を行うために、連絡先の更新をしていきたいと考えている。学友会の活動を充実さ

せるといふ目的のもと、会員の皆様には名簿登録、更新に協力してもらいたい。
・研究室単位で連絡先を管理していることが多いため、学友会と研究室で連携を取ってやっていきたい。
全会一致で承認された。

【報告事項】

1. 令和2年度薬学生涯研修講座の開催について

若林監事より説明。

・令和2年度薬学生涯研修講座については新型コロナウイルス感染症の影響で例年通りの開催は難しいことから、今年度の開催は中止をすることとした。静岡がんセンターとの連携強化について

安倍会長より説明。

がんセンターが来年度から県立大学生2名を受け入れていただけることとなった。（賀川理事）

2. 静薬学友会報第88号編集作業の進捗状況について

3. 薬学キャリアデザイン近藤寄附講座について木下理事より説明。

・前期は全てZoomにより講義が行われた。

・学生からは好評のコメントをいただいている。

・新型コロナウイルス感染症の影響により、海外への留学や学会参加は厳しい状況であるため、今期は学術研究に係る支援については見送ることとした。

・剣祭時の卒業生による講義および進路相談会も中止にした。

4. その他

・各会合の実施について

仲谷理事：関東地区については総会のあり方について検討したが、現時点では総会そのものを対面でやるのは無理だろうということに至った。

その経緯を学友会会報、学友会ウェブサイトに掲載した。
前田理事：東海地区は、今年度は見送りの方向で考えている。事案についてはメール会議やウェブサイトをj利用して会員に周知しようと考えている。

安倍会長：このまま感染症の状況が長期的に変わらず、地区の活動ができない状況が続くようであれば、場合によっては支援金のあり方を見直さなくてはならないと考えている。

・静岡県地区代表について
杉井理事が引き続き地区代表としてご協力いただけることになった。
・薬学生の就職状況について

・静岡県立大学同窓会連合会について

一般社団法人静薬学友会 令和2年度第3回理事会報告

日 時：令和3年1月9日（土曜日）15：00～17：00

Zoomを用いたオンライン会合により開催（正副会長のみ本部集合）
出席者：理事16名、監事2名、顧問1名

安倍道治、高橋千恵子、賀川義之、秋山欣三、浅井知浩、岩崎年史、
大木明代、岡野幸次、木下俊也、清水広介、鈴木隆、仲谷博明、永吉翼、
前田徹、南彰、渡邊学（以上理事）

伊藤由彦、若林敬二（以上監事）

横倉輝男（以上顧問）

事務局 鈴木いずみ

欠席者：理事3名、顧問1名

大澤勝一、黒羽子孝太、近藤隆（以上理事）

木苗直秀（以上顧問）

出席者は理事19名中16名で、定款第37条に基づき理事会は成立することが確認された。

議題

【審議事項】

1. 令和3年度事業計画（案）について

安倍会長が資料に従って説明。賀川理事より、静岡県立大学事業への参加について、入学式式典は来賓が絞られるため同窓会組織の招待が見送られる見込みであること、謝恩会は中止されること、新入生ガイダンスはZoomで行うこと、就職説明会は開催予定であることが説明された。若林監事より、リレー・フォー・ライフは9月18日（土）、19日（日）に開催される旨説明があった。

以上、全会一致で承認された。

2. 令和3年度定時総会について

安倍会長より、定款の方針に基づき、総会では審議事項で決算報告、報告事項で収支予算を扱うこと、また、コロナ禍でオンライン会合になることも予想されることから、事前の準備も含め十分な対応を行うことが説明された。

全会一致で承認された。

3. 令和3年度収支予算（案）について

伊藤監事が資料に従って説明。本予算案はコロナ禍の影響がないものとして立案されたこと、また、渡邊理事より、運営管理会社の設立予算は計上されないこ

とが確認された。以上、全会一致で承認された。

4. 新たに収益事業を行うための受け皿となる「運営管理会社の設立」について
会長より、資料に従って、運営管理会社の設立の目的、組織、事業の内容、設立時期、その他の事項について説明があった。

これに対して、理事より具体的な収益事業の内容や寄付行為、学友会との関係、株式会社とした場合の資金の確保などについて質問があった。会長より、現時点での説明を行ったが、まだ構想の段階なので詳細は未定であり、今後、タスクフォースを招集し、運営管理会社の具体的な内容を明らかにしたうえで、5月の理事会、6月の定時総会に諮ることとした旨の提案があり、理事会としてはこれを承認することとした。

5. 年会費クレジット自動振替について

伊藤監事が資料に従い説明。自動振替は、一年分の費用が高額（12万円、60人分の維持会費に相当）になるため、費用対効果の点で自動振替の利用は現実的でない旨説明があった。

質疑応答の後、年会費クレジット自動振替については実施を見送ることが、全会一致で承認された。

6. 静岡県立大学同窓会連合会則案について

木下理事が資料に従い、2年前より鬼頭学長を中心に設立を目指している静岡県立大学同窓会連合会について説明があった。

質疑応答の後、安倍会長より、静薬学友会としては連合会を作ることは否定しないが、議論が上がった点を明確にするよう連合会に働きかける旨、木下理事に要請があった。

【報告事項】

1. 令和2年度薬学生涯研修講座の開催について

若林監事、渡邊理事より、講座については新型コロナウイルス感染症の影響により中止される旨報告があった。

2. 静岡がんセンターとの連携強化について

安倍会長より、コロナ禍で活動は9月以降行われていない旨、来年度後期から県大の学生実習生2名が受け入れられる旨報告があった。

3. 静薬キャリアデザイン近藤寄附講座について（事業報告）

木下理事より留学支援事業は、コロナ禍であることから中止している旨報告があった。

4. その他

伊藤監事より、卒業時のメールアドレス登録と年会費の徴収について、卒業時にほぼ全員から集めることができた旨報告があった。

一般社団法人静薬学友会 令和3年度第1回理事会報告

日 時…令和3年5月22日(土曜日) 15:00～17:00
実施方法…Zoomを用いたオンライン会合により開催(正副会長のみ本部集合)
出席者…理事16名、監事1名、顧問1名

安倍道治、高橋千恵子、賀川義之、浅井知浩、岩崎年史、大木明代、大澤勝一、岡野幸次、木下俊也、黒羽子孝太、清水広介、鈴木隆、仲谷博明、永吉翼、前田徹、渡邊学(以上理事)

若林敬二(以上監事)
横倉輝男(以上顧問)
事務局 鈴木いずみ

欠席者…理事3名、監事1名、顧問1名
秋山欣三、近藤隆、南彰(以上理事)

伊藤由彦(以上監事)
木苗直秀(以上顧問) (敬称略)

出席者は理事19名中16名で、定款第37条に基づき理事会は成立することが確認された。議題に先立ち、賀川理事より薬学部長への再選と3期目の就任の報告があった。

議題

【報告事項】

1. 一般社団法人静薬学友会第4回定時総会について

令和3年6月6日にZoomで行う。

2. 代議員の新規就任について

学生代議員が年度替わりで交代となる。7名のうち2名(チウジユンキ氏、猪又健吾氏)が新規就任となる。

3. 薬学キャリアデザイン近藤寄附講座事業報告、事業計画

木下理事より報告

今期行った講義は表の通りである。コロナ感染症対策で剣祭が中止となったため、進路相談会は中止となった。また、同じくコロナで留学・学術研究に係わる支援の実施を見送った。

令和3年度は1年生4コマ、3年生2コマ、4年生1コマをキャリアデザイン近藤寄附講座として担当する。講師の招聘手続きを行った。

4. 令和2年度成績優秀者賞及び岩崎賞の決定について

賀川理事より報告

岩崎賞については同点のため2名選ばれることになった。

5. 静岡県立大学同窓会連合会則案について

木下理事より報告

連合会については各学部から1名ずつの委員を出し、Zoomで月一回の会合をもって話し合ってきた。会費については、第12条で記載、会費の徴収はなしとする。寄付金の徴収を妨げない。事務局は県立大学事務局内に置くことになる。理事は各学部から2名選ぶこととする。今期の剣祭で会則を決定することを目標とする。

6. その他

若林監事より報告

薬学研修講座についてはWEBとのハイブリットでやるかどうか、コロナの収束状況を見ながら検討したい。

【審議事項】

1. 令和2年度事業報告

安倍会長より報告

特に反対意見なく、事業報告は承認された。

2. 令和2年度決算報告

若林監事より報告

トータルで見るとコロナで色々な行事が中止になったので黒字となった。監査報告で監事が正確かつ妥当であることを認めた。税理士のチェックも受けている。

3. 令和3年度事業計画 前回理事会で承認済

4. 令和3年度収支予算 前回理事会で承認済

5. 運営管理会社の設立について

安倍会長より報告

社団法人化して3年目となる学友会の事業を発展させ、地域医療に貢献できる法人として進化するとともに、学友会の運営の安定化にも資するため、新たに、学友会の有志により設立する運営管理会社に対して、学友会は、資本参加するほか、実施する事業への支援を行うための提案を行った。

運営管理会社の定款案とともに資本参加する場合の資金は、近藤基金を活用すること等が承認された。

6. 事務取扱規定の修正について

安倍会長より報告

退職祝い金の記載が事務局では判断が出来にくかったため、基準を明確化する。理事の賛同が得られたため、本日付で改定、施行する。

一般社団法人静薬学友会 第4回定時総会報告

日時…令和3年6月6日(日曜日) 13:30～15:30

実施方法…Zoomを用いたオンライン会合により開催(正副会長のみ本部集合)

出席者…社員(代議員)…28名(ただし理事兼任者も含む)

チウジュンキ、山田遥香、宮国大輔、中村洗友、三坂真元、加藤彩香、佐藤泰士、関本征史、多田義孝、中村和重、松浦大輔、本島玲子、

勝山善彦、村松郁延、伊藤めぐみ、内田信也、大木明代(役員兼任)、

清水広介(役員兼任)、田中喜久夫、深澤由紀子、渡邊学(役員兼任)、

三上栄一、河本光宏、藤本司、松田道明、池田潔、井上泰秀、中山大輔
役員…理事16名、監事2名、顧問1名

安倍道治、高橋千恵子、賀川義之、秋山欣三、浅井知浩、岩崎年史、大木明代、大澤勝一、岡野幸次、木下俊也、黒羽子孝太、清水広介、

仲谷博明、永吉翼、前田徹、渡邊学(以上理事)

伊藤由彦、若林敬二(以上監事)
横倉輝男(以上顧問)

欠席者…田中夏暉、五十嵐千乃、猪又健吾、水島教之、石原由美、内田貴啓、

高橋忠伸、笠井智代、松崎雅英(以上代議員)

近藤隆、鈴木隆、南彰(以上理事)
木苗直秀(以上顧問)

開会の挨拶…高橋千恵子(副会長)

薬学部長挨拶…賀川義之(副会長)

議題…代議員総数37名中出席28名、欠席により議決権行使を行った代議員9名
で、決議に必要な定員数を満たすため、定款第5章第22条により総
会として成立することを確認した。議長は定款に従い、安倍道治代表理
事(会長)が担当し、会を進行した。

議事録作成…清水広介(平成13年卒)

議事録署名人…高橋千恵子(昭和51年卒)、賀川義之(昭和58年卒)

【報告事項】
1. 令和2年度事業報告
安倍会長…資料に従い、令和2年度事業報告を行った。

2. 令和3年度事業計画
安倍会長…資料に従い、令和3年度事業計画について説明を行った。

3. 令和3年度収支予算
伊藤監事…資料に従い、令和3年度収支予算について説明を行った。

伊藤監事…資料に従い、令和3年度収支予算について説明を行った。

4. 運営管理会社の設立について

安倍会長が資料に基づき説明

運営管理会社の設立については、今年1月9日の理事会でタスクフォースを
設置することを了承いただき、5月22日の理事会でタスクフォース報告書と
して報告し、審議の結果、運営管理会社の設立について承認をいただいたこ
とを報告した。

また、新会社は、7月には登記を行い、発足する予定であることを報告した。
なお、理事会で承認をいただいた点は下記の3点である。

1. 運営管理会社の定款案(学友会とは別の組織で有志により設立、学友会
は株主及び役員として参画)

2. 株式の40%を学友会が所有、資金は近藤基金を活用すること。

3. 初年度の事業計画は、今後の具体的な事業を展開する上で必要な調査事
業であること。

以上、運営管理会社の報告を行い、質疑、要望などの意見をいただいた上で、 運営管理会社の設立については了承された。

5. 薬学キャリアデザイン近藤寄附講座について
木下理事…資料に従い、薬学キャリアデザイン近藤寄附講座の令和2年度事業
報告、令和3年度事業計画、令和2年度収支報告について説明した。

6. 令和2年度成績優秀者賞及び岩崎賞の決定について
賀川理事…資料に従い、令和2年度成績優秀者賞及び岩崎賞の受賞者について
説明した。

7. その他 今年度の各地区の活動状況について

池田代議員(中国地区代表)より説明。

コロナ禍での他の地区の活動状況を教えていただきたい。また、次期地区代
表の候補者を決めるにあたって、対面でなければなかなか人選は難しい。何
かご意見があればうれしい。

安倍会長…提案として後日、地区代表の方の集まり(Zoom)を設けて意見
交換をしてみたいと思っている。

【審議事項】

1. 令和2年度決算報告

伊藤監事…資料に従い、令和2年度決算について報告した。
特に異議はなく、承認された。

貸借対照表

一般社団法人 静葉学友会
全事業所

[税込] (単位: 円)
令和3年 3月31日 現在

		《資産の部》	
【流動資産】	(現金・預金)		
	現金	4,745	
	普通預金	43,759,246	
	現金・預金計	43,763,991	
	流動資産合計		43,763,991
	資産合計		43,763,991
【流動負債】		《負債の部》	
	未払金	205,200	
	未払法人税等	71,000	
	流動負債合計		276,200
	負債合計		276,200
	前期繰越正味財産		41,328,977
	当期正味財産増減額		2,158,814
	正味財産合計		43,487,791
	負債及び正味財産合計		43,763,991

決算報告書

第 3 期

自 令和2年 4月 1日

至 令和3年 3月31日

一般社団法人 静葉学友会

静岡県静岡市駿河区谷田 5 2 番地 1

財産目録

一般社団法人 静葉学友会
全事業所

【税込】(単位：円)
令和3年 3月31日 現在

		《資産の部》	
【流動資産】			
(現金・預金)			
現金	4,745		
普通預金	43,759,246		
静岡銀行 草薙支店	0934106		
郵便局 二三人	5637782	(41,243,919)	
清水銀行 美術館前	2192429	(235,715)	
郵便振替口座		(637,313)	
現金・預金計		(1,642,299)	
流動資産合計		43,763,991	
《負債の部》			
未払金	205,200		
未払法人税等	71,000		
流動負債合計		276,200	
負債合計		276,200	
正味財産			43,487,791

正味財産増減計算書

一般社団法人 静葉学友会

【税込】(単位：円)
自 令和2年 4月 1日 至 令和3年 3月31日

	一般会計	近藤基金	災害支援基金	総合計
【経常収益】				
【受取会費】				
正会員受取会費	4,006,000			4,006,000
受取入会金	5,560,000			5,560,000
【受取寄付金】				
受取寄付金				0
【その他収益】				
受取利息	361			367
雑収益	120,000			120,000
経常収益計	9,686,361	0	6	9,686,367
【経常費用】				
【事業費】				
広報名簿事業費	536,426			536,426
会報発行費	1,381,373			1,381,373
退官記念事業費	335,000			335,000
大学行事援助費	597,110			597,110
渉外費	60,690			60,690
会員支援活動費	743,480			743,480
会議費(事業)	0	112,170		112,170
事業費計	3,654,079	112,170	0	3,766,249
【管理費】				
(人件費)				
給料手当	2,503,680			2,503,680
法定福利費	11,223			11,223
人件費計	2,514,903	0	0	2,514,903
(その他経費)				
会議費	150,404			150,404
通信運搬費	91,377			91,377
消耗品費	316,686			316,686
水道光熱費	26,030			26,030
地代家賃	3,690			3,690
支払手数料	587,214			587,214
その他経費計	1,175,401	0	0	1,175,401
管理費計	3,690,304	0	0	3,690,304
経常費用計	7,344,383	112,170	0	7,456,553
当期経常増減額	2,341,978	(112,170)	6	2,229,814
【経常外収益】				
経常外収益計	0	0	0	0
【経常外費用】				
経常外費用計	0	0	0	0
税引前当期正味財産増減額	2,341,978	(112,170)	6	2,229,814
法人税、住民税及び事業税	71,000			71,000
当期正味財産増減額	2,270,978	(112,170)	6	2,158,814
前期繰越正味財産額	5,798,410	34,893,260	637,307	41,328,977
次期繰越正味財産額	8,069,388	34,781,090	637,313	43,487,791

一般社団法人静薬学友会 代議員 (37名)

地区別50音順 敬称略

氏名	卒業・修了年 (学生は入学年)	地区	氏名	卒業・修了年	地区
熊谷 拓也	令和3年4月	学生	石原 由美	昭和57年	静岡県
山田 遥香	令和2年4月	学生	内田 信也	平成5年	静岡県
田中 夏暉	平成31年4月	学生	内田 貴啓	平成25年	静岡県
五十嵐 千乃	平成30年4月	学生	大木 明代	昭和62年	静岡県
宮国 大介	平成29年4月	学生	清水 広介	平成13年	静岡県
中村 洸友	平成28年4月	院生	高橋 忠伸	平成11年	静岡県
猪又 健吾	令和3年4月(博士課程)	院生	田中 喜久夫	昭和59年	静岡県
水島 教之	昭和54年	北海道	深澤 由紀子	昭和59年	静岡県
三坂 眞元	平成16年	東北	渡邊 学	平成7年	静岡県
加藤 彩香	平成26年	関東	笠井 智代	平成18年	東海
佐藤 泰士	平成5年	関東	松崎 雅英	昭和60年	東海
関本 征史	平成8年修了	関東	三上 栄一	昭和49年	東海
多田 義孝	平成1年	関東	河本 光宏	昭和57年	関西
中村 和重	平成4年	関東	藤本 司	昭和63年	関西
松浦 大輔	平成1年	関東	松田 通明	平成2年	関西
本島 玲子	昭和58年	関東	池田 潔	昭和54年	中国
勝山 善彦	昭和57年	長野県	井上 泰秀	昭和59年	四国
村松 郁延	昭和44年	北陸	中山 大輔	平成8年	九州・沖縄
伊藤 めぐみ	平成15年	静岡県			

一般社団法人静薬学友会 役員 (23名)

敬称略

氏名	卒業年	役職	氏名	卒業年	役職
安倍 道治	昭和46年	代表理事 会長	清水 広介	平成13年	理事
高橋 千恵子	昭和51年	理事 副会長	鈴木 隆	昭和54年	理事
賀川 義之	昭和58年	理事 副会長	仲谷 博明	昭和45年	理事
秋山 欣三	昭和56年	理事	永吉 翼	平成12年	理事
浅井 知浩	平成9年	理事	前田 徹	昭和61年	理事
岩崎 年史	昭和46年	理事	南 彰	平成12年	理事
大木 明代	昭和62年	理事	渡邊 学	平成7年	理事
大澤 勝一	昭和59年	理事	伊藤 由彦	平成14年	監事
岡野 幸次	昭和57年	理事	若林 敬二	昭和46年	監事
木下 俊也	昭和53年	理事	横倉 輝男	昭和40年	顧問
黒羽子 孝太	平成8年	理事	木苗 直秀	昭和40年	顧問
近藤 隆	昭和46年	理事			

山田 浩 教授（医薬品情報解析学分野）最終講義のご案内

静岡県立大学薬学部 教授 山田浩先生は令和4年3月末をもちまして、御定年退職の節目を迎えられることになりました。つきましては、年度末に最終講義を行いますので、ご案内申し上げます。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

詳細は、静岡県立大学薬学部ホームページ (<https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/>) にてお知らせいたします。



お問い合わせ 静岡県立大学薬学部 医薬品情報解析学分野 講師 古島大資

TEL 054-264-5591 Eメール : dfuru@u-shizuoka-ken.ac.jp

令和3年度薬学生涯研修講座

薬局認定の基準改正と薬剤師の業務・資質向上に関する課題 －連携薬局と薬剤師の卒後研修－

日 時：令和4年1月23日（日） 午後1時～4時30分

会 場：男女共同参画センターあざれあ 2階 大会議室（JR静岡駅より西に徒歩7分）

開 催 方 法：集合研修およびオンラインでの配信（予定）

参加申込方法：静薬学友会ホームページから参加登録をお願いいたします。

※日本薬剤師研修センター研修認定薬剤師制度の単位取得については、ホームページでお知らせします。

薬学生涯研修講座運営委員会 委員長 若林敬二

問合せ・参加申込 一般社団法人静薬学友会

〒422-8526 静岡県静岡市駿河区谷田52-1

TEL 054-265-8763 FAX 054-265-8769

Email : shizuyak@u-shizuoka-ken.ac.jp

HP : <http://shizuyaku.jp>

静薬学友会中国地区同窓会総会開催のご案内

この度静薬学友会中国地区同窓会総会を下記のとおりオンライン方式で開催いたします。是非、この機会を利用して地域や世代間の交流を図り、静薬学友会の絆を深めましょう。皆様お誘い合わせの上ご参加下さいますようお願い申し上げます。

日 時：令和3年11月14日（日）13：00～15：00

開催方法：ZOOMによるオンライン方式

<総 会> 13：00～13：30

「静薬学友会の活動」 一般社団法人静薬学友会会長 安倍道治 様（昭和46年卒）

「静岡県立大学の近況」 静岡県立大学薬学部長 賀川義之 先生（昭和58年卒）

「中国地区の活動について」中国地区同窓会代表 池田 潔（昭和54年卒）

<講演会> 13：30～15：00（薬剤師研修シールの配布はございません。）

『新興ウイルス感染症と抗ウイルス薬』

静岡県立大学薬学部生化学分野 前教授 鈴木 隆 先生（昭和54年卒）

<参加資格> 支部にかかわらず、静薬学友会会員の方はご参加いただけます。（先着80名）

<参加申込方法> ご参加いただける方は、下記Eメールまたは静薬学友会ホームページの会員専用サイト「マイページ」より**令和3年11月8日（月）**までにお申し込み下さい。

ZOOM参加用のIDとパスコードをお送りいたします。

中国地区同窓会代表 池田 潔 広島国際大学薬学部薬学科
(TEL・FAX 0823-73-8936)

問い合わせ・申込先：一般社団法人静薬学友会

E-mail：shizuyak@u-shizuoka-ken.ac.jp

静薬学友会ホームページ：http://shizuyaku.jp

集記 編後

今年の夏、小学生の息子が夏休みの思い出を絵日記に書きました。そこにはお皿に盛られた桃が描かれていました。美味しそうな桃をインターネットの通販サイトで見つけて、これまで聞いたことが



ない品種でしたがお取り寄せしてみました。あまりにも美味しかったため、二回目のお取り寄せもしました。確かに美味しかったです。しかし、息子の夏休みの思い出になるとは思ってもみませんでした。ユニークな着眼点だなと思う一方、コロナ禍で外出することや遊びに行くこともままならず、新型コロナウイルスが広がる前とは違った日常になっているのかと、あらためて感じました。近いうちに、まぶしい日差しの下での桃狩りや海水浴やスイカ割り、花火大会、夏祭り、田舎への帰省といった思い出が絵日記のテーマとなる日常が再び訪れることを楽しみにしています。

本号の静薬学友会報では、「今、改めて考える薬学の役割」という特集テーマで4名の方からご寄稿賜りました。それぞれのお立場で、薬学・薬剤師の役割についてご執筆いただきました。基礎学問や幅広い事象を俯瞰的に捉え統合する重要性、新たな役割に一步踏み出すことの必要性を改めて感じました。また多くの方々のご協力により静薬学友会報第89号を発行することが出来ました。この場をお借りして感謝申し上げます。

一年前の静薬学友会報編集後記で、伊藤由彦先生が「次号の編集後記では新型コロナを過去のこととして語れるようになって欲しいと切に願っている」と結ばれていました。現状、この原稿を執筆している2021年9月時点では静岡県にも非常事態宣言が発令されています。新規感染者数は減少傾向にあるものの、まだまだ予断を許さない状況です。一方、新型コロナウイルスワクチン接種は、まだじゅうぶんとは言えませんが、日本の人口の半分が二回

目の接種を完了したと発表されました。またワクチンだけでなく、治療薬や治療法の開発が迅速に進められています。一日も早い新型コロナウイルスの収束を願ってやみません。次号90号の編集後記では新型コロナウイルスを過去のこととして語れるようになって欲しいと切に願っています。

会報編集委員長 黒羽子孝太(平成8年卒)



訃報

次の方が逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

二橋 純一様 (元静薬学友会役員 昭和四十六年卒)

令和三年六月二十二日 逝去

菅 敏幸様 (医薬品製造化学分野教授)

令和三年七月二十四日 逝去

会報担当

- | | | | |
|-----|----------------|----------------|-----------------|
| 委員長 | 黒羽子孝太 (平成8年卒) | 理事 | 薬学部 免疫微生物学分野) |
| | 浅井 知浩 (平成9年卒) | 理事 | 薬学部 医薬生命化学分野) |
| | 大木 明代 (昭和62年卒) | 理事) | |
| | 南 彰 (平成12年卒) | 理事 | 薬学部 生化学分野) |
| | 伊藤 由彦 (平成14年卒) | 監事 | 薬学部 薬食研究推進センター) |
| | 安倍 道治 (昭和46年卒) | 一般社団法人静薬学友会会長) | |

静薬学友会報 第89号 令和三年十月一日発行

〒422-8526 静岡市駿河区谷田五二一 静岡県立大学薬学部内
 発行者 一般社団法人静薬学友会
 振替口座 〇〇八二〇一八一一九〇二二
 TEL 〇五四―二六五―八七六三
 FAX 〇五四―二六五―八七六九
 メールアドレス shizuyak@u-shizuoka-ken.ac.jp
 ホームページアドレス http://shizuyaku.jp

正会員の皆様へ 会費納入のお願い

一般社団法人静薬学友会の運営は皆様の貴重な年会費で賄っております。具体的には、静岡県立大学薬学部の教育研究に対する支援事業、会員の住所管理や HP の運営、生涯研修の実施、会報発行、地区同窓会活動への支援など、多岐にわたる同窓会活動に使用させていただいております。しかしながら、近年納入率が 20% 台にとどまっており、厳しい運営を迫られていることから、将来に向け安定した運営を確保するためにも、皆様のさらなるご理解、ご協力をお願いする次第です。本部としましては、一括納入可能な 10 年会費や終身会費をお勧めします。

1. クレジットカード決済

静薬学友会ホームページ (<http://shizuyaku.jp>) の「マイページ」(会費支払・各種お申込み) から納入いただけます

2. 郵便局から振込用紙を利用して納入

同封の振込用紙にて郵便局窓口および郵便 A T M から納入いただけます

※ 10 年会費および終身会費は、振込金額を二重線で訂正することにより郵便局窓口にて納入いただけます

3. コンビニエンスストアから振込用紙を利用して納入

同封の振込用紙にてコンビニエンスストアから年会費を納入いただけます (納入期限 令和 4 年 3 月 31 日)

4. モバイル決済

同封の振込用紙に印字されたバーコードおよび QR コードにて、年会費を納入いただけます

(納入期限 令和 4 年 3 月 31 日)

料金収納用バーコードまたは、払込票余白に印刷された QR コードをスマートフォンで読み取り、決済画面にアクセスします。

The image shows a detailed payment slip (払込票) and an 'お買上明細書兼ご請求書' (Invoice and Request Form). The payment slip includes fields for bank name (東京三菱銀行), amount (10,000円), and recipient information (DBK 電話システム 収納代行センター). It also features a QR code and a barcode for mobile payment. Callouts indicate 'アクセス方法1 GS1-128バーコード' (Access Method 1: GS1-128 Barcode) and 'アクセス方法2 QRコード' (Access Method 2: QR Code). Logos for Line Pay, Pay B, and mobile payment services like Edy, PayPay, and Bank are shown. A smartphone icon labeled 'パシヤ' (Pasia) is also present.

		会費の種類		
		年会費 (2,000 円)	10 年会費 (20,000 円)	終身会費 (50,000 円)
納入方法	1. クレジットカード決済	○	○	○
	2. 郵便局	○	○	○
	3. コンビニエンスストア	○	×	×
	4. モバイル決済	○	×	×

ご不明な点等ございましたら、静薬学友会事務局までお問合せください

問合せ先：一般社団法人静薬学友会 事務局

TEL 054-265-8763

E-mail shizuyak@u-shizuoka-ken.ac.jp

昭和63(1988)年卒	森本 生衣 横田 仁恵		增崎 詞子 松井 明里 望月 由木子	平成10(1998)年卒		高木 友里 竹内 寛晴 吉井 啓太	平成26(2014)年卒	渡邊 理香 井上 祐希江 上原 将士	折笠 文哉 片桐 百恵 勝俣 瑞木																																			
10年	居出上 敬祐 伊吹 裕子	(修士) 平成5(1993)年卒	長澤 晋吾 朝烏 章 安部 紳一	終身	大久保 志保 大澤 美由紀 木村 芳子	10年	終身	加藤 彩香 外山 真衣 成田 雄大	神谷 大地 木村 彩瑛 木村 爵																																			
10年	小澤 久仁子 笠毛 浩彦 神谷 京子	10年	阿部 庸江 植田 喜一郎 上埜 勝	終身	後藤 こま希 出羽 歩美 野寄 秀明	平成18(2006)年卒	終身	船本 雅文 吉田 裕和 若宮 紀子	木野 駿也 坂井 宥哉 坂本 紅星																																			
	川瀬 一朗 川瀬 直子 久門 弘子 国府 孝敏 中村 龍太 藤本 司 堀田 博美 牧草 由紀夫		内田 信也 大道 克裕 小澤 紀子 影山 知子 梶田 剛 河島 知子 佐藤 泰士 高本 英治 中村 光博	平成11(1999)年卒	金子 雪子 栗田 拓朗 小林 由紀子 高橋 忠伸 深津 英人 福田 達也 村田 隆之 横田 崇	平成18(2006)年卒	相原 淑子 井上 直樹 千葉 健人 保坂 卓臣 茂木 大地 吉塚 奈津子 涌本 佳奈子 林 哲男	(博士) 平成27(2015)年卒	柏倉 康治 小山内 崇人 國安 健太 佐藤 晶彦 鈴木 美帆 鈴木 祐介 中田 裕之 古谷 孝理 宮崎 雄輔	坂野 紅介 佐原 由莉 猿橋 ひとみ 進藤 大地 菅井 琢也 杉山 純一 杉山 優雅 鈴木 詩絵里																																		
平成元(1989)年卒	今津 佳子 大田 直樹 恩田 健 多田 義孝 土井 亜紀子 土井 久寿 長尾 美宏 兵庫 淳志 松浦 大輔 (修士) 小西 伸一郎	終身	中村 理子 名和 秀起 西村 慎也 本多 達也 杉本 憲昭 飯田 海保 池谷 祐児 黄倉 崇 大城 まゆみ 大塚 有加 河西 きよみ 櫻井 幹也 高井 奈美 富永 民雄 仲地 剛 西島 秀明 水野 麻里 山中 章弘 和田 美由紀 渡邊 学 渡邊 佳子 勝又 貴史 朝烏 篤枝 内田 恵 大木 健史 横山 史康 川口 典子 川崎 由紀 木村 冬樹 小西 宏治 小宮 直美 鈴木 博子 鈴木 麻由美 滑川 加織 水口 英明 山本 裕一 横山 由斉 吉田 友子 渡邊 啓子 渡邊 学 池田 美保 岩崎 綾乃 大石 崇秀 大川 知子 大月 昭子 尾形 和美 尾形 有規 岡本 典子 河村 美保花 喜好 昭彦 栗田 晃伸 澤下 仁子 鈴木 太嘉栄 鈴木 登紀子 住井 直美 竹入 章 谷本 倫子 築本 美喜子 長尾 明美 中園 裕子 中村 和重 新田 茂彦 福原 実 藤本 勝博	平成12(2000)年卒	石川 裕子 板持 雅恵 大久保 努 小田 典子 菊池 保正 関口 祐史 高木 貴治 瀧 祐介 長瀬 邦彦 中西 美智 永吉 翼 花井 理恵子 南 彰 小林 照幸 石川 智之 岩坪 沙奈恵 金子 直樹 小柳 美幸 清水 広介 田川 真由 田中 恵 福井 貴史 星野 有吾 吉田 梨沙 若尾 晃一 伊藤 孝 伊藤 由彦 川合 冬樹 笹 靖昇 二橋 智郎 長谷部 ふみ 長谷部 文春 伊藤 めぐみ 稲垣 芳文 上原 直美 植山 敬生 大西 真央 刀坂 泰史 清水 直美 正野 厚子 鈴木 寛 高久 修司 中島 聡子 中村 ほなみ 林 豪士 原田 俊彦 平野 裕子 益岡 尚由 山岡 麻衣子 岡崎 浩一 奥山 大輔 小河 聡史 河合 美亜季 米谷 節代 瀧 優子 永吉 旭土 三坂 真元 北尾 有樹子 山村 香苗 大森 智史	平成13(2001)年卒	石川 智之 岩坪 沙奈恵 金子 直樹 小柳 美幸 清水 広介 田川 真由 田中 恵 福井 貴史 星野 有吾 吉田 梨沙 若尾 晃一 伊藤 孝 伊藤 由彦 川合 冬樹 笹 靖昇 二橋 智郎 長谷部 ふみ 長谷部 文春 伊藤 めぐみ 稲垣 芳文 上原 直美 植山 敬生 大西 真央 刀坂 泰史 清水 直美 正野 厚子 鈴木 寛 高久 修司 中島 聡子 中村 ほなみ 林 豪士 原田 俊彦 平野 裕子 益岡 尚由 山岡 麻衣子 岡崎 浩一 奥山 大輔 小河 聡史 河合 美亜季 米谷 節代 瀧 優子 永吉 旭土 三坂 真元 北尾 有樹子 山村 香苗 大森 智史	平成14(2002)年卒	伊藤 由彦 川合 冬樹 笹 靖昇 二橋 智郎 長谷部 ふみ 長谷部 文春 伊藤 めぐみ 稲垣 芳文 上原 直美 植山 敬生 大西 真央 刀坂 泰史 清水 直美 正野 厚子 鈴木 寛 高久 修司 中島 聡子 中村 ほなみ 林 豪士 原田 俊彦 平野 裕子 益岡 尚由 山岡 麻衣子 岡崎 浩一 奥山 大輔 小河 聡史 河合 美亜季 米谷 節代 瀧 優子 永吉 旭土 三坂 真元 北尾 有樹子 山村 香苗 大森 智史	平成15(2003)年卒	伊藤 めぐみ 稲垣 芳文 上原 直美 植山 敬生 大西 真央 刀坂 泰史 清水 直美 正野 厚子 鈴木 寛 高久 修司 中島 聡子 中村 ほなみ 林 豪士 原田 俊彦 平野 裕子 益岡 尚由 山岡 麻衣子 岡崎 浩一 奥山 大輔 小河 聡史 河合 美亜季 米谷 節代 瀧 優子 永吉 旭土 三坂 真元 北尾 有樹子 山村 香苗 大森 智史	平成16(2004)年卒	岡崎 浩一 奥山 大輔 小河 聡史 河合 美亜季 米谷 節代 瀧 優子 永吉 旭土 三坂 真元 北尾 有樹子 山村 香苗 大森 智史	平成17(2005)年卒	大森 智史	平成19(2007)年卒	世戸 孝樹 田中 紫葉子 鶴田 修 根建 悠希 野嶋 芳紀 兵頭 正員 総崎 克哉 和久田 浩一 天野 祥吾 岩田 皓生 内本 武亮 近江 明大 尾崎 園子 鎌田 修二 木村 晋一郎 佐藤 秀行 佐藤 紘彰 鈴木 早江子 高倉 惇 田野井 隆 藤原 理恵 今中 宏真 入江 こはる 岩佐 陽介 宇都宮 崇広 遠藤 良佑 大石 友美 紅林 佑希 椎野 阿斐 設楽 直秀 新庄 慧 鈴木 美希 中西 勝宏 森田 真介 伊藤 智悟 大内 仁志 高田 俊介 新谷 亮 比嘉 香澄 青木 裕希子 井出 和希 鈴木 寛人 山口 桃生 横山 智紀 鈴木 絵莉 塚口 雄太 坪井 絢香 成島 悠太 長吹 晴一郎 豊泉 樹一郎 石田 裕丈 井出 貴文 内田 貴啓 大滝 俊也 寺田 健一郎 時部 正和 長澤 孝真 藤山 みなみ 藤山 裕兒 山根 正敬	平成20(2008)年卒	天野 祥吾 岩田 皓生 内本 武亮 近江 明大 尾崎 園子 鎌田 修二 木村 晋一郎 佐藤 秀行 佐藤 紘彰 鈴木 早江子 高倉 惇 田野井 隆 藤原 理恵 今中 宏真 入江 こはる 岩佐 陽介 宇都宮 崇広 遠藤 良佑 大石 友美 紅林 佑希 椎野 阿斐 設楽 直秀 新庄 慧 鈴木 美希 中西 勝宏 森田 真介 伊藤 智悟 大内 仁志 高田 俊介 新谷 亮 比嘉 香澄 青木 裕希子 井出 和希 鈴木 寛人 山口 桃生 横山 智紀 鈴木 絵莉 塚口 雄太 坪井 絢香 成島 悠太 長吹 晴一郎 豊泉 樹一郎 石田 裕丈 井出 貴文 内田 貴啓 大滝 俊也 寺田 健一郎 時部 正和 長澤 孝真 藤山 みなみ 藤山 裕兒 山根 正敬	平成21(2009)年卒	入江 こはる 岩佐 陽介 宇都宮 崇広 遠藤 良佑 大石 友美 紅林 佑希 椎野 阿斐 設楽 直秀 新庄 慧 鈴木 美希 中西 勝宏 森田 真介 伊藤 智悟 大内 仁志 高田 俊介 新谷 亮 比嘉 香澄 青木 裕希子 井出 和希 鈴木 寛人 山口 桃生 横山 智紀 鈴木 絵莉 塚口 雄太 坪井 絢香 成島 悠太 長吹 晴一郎 豊泉 樹一郎 石田 裕丈 井出 貴文 内田 貴啓 大滝 俊也 寺田 健一郎 時部 正和 長澤 孝真 藤山 みなみ 藤山 裕兒 山根 正敬	平成22(2010)年卒	伊藤 智悟 大内 仁志 高田 俊介 新谷 亮 比嘉 香澄 青木 裕希子 井出 和希 鈴木 寛人 山口 桃生 横山 智紀 鈴木 絵莉 塚口 雄太 坪井 絢香 成島 悠太 長吹 晴一郎 豊泉 樹一郎 石田 裕丈 井出 貴文 内田 貴啓 大滝 俊也 寺田 健一郎 時部 正和 長澤 孝真 藤山 みなみ 藤山 裕兒 山根 正敬	平成23(2011)年卒	青木 裕希子 井出 和希 鈴木 寛人 山口 桃生 横山 智紀 鈴木 絵莉 塚口 雄太 坪井 絢香 成島 悠太 長吹 晴一郎 豊泉 樹一郎 石田 裕丈 井出 貴文 内田 貴啓 大滝 俊也 寺田 健一郎 時部 正和 長澤 孝真 藤山 みなみ 藤山 裕兒 山根 正敬	平成24(2012)年卒	伊藤 智悟 大内 仁志 高田 俊介 新谷 亮 比嘉 香澄 青木 裕希子 井出 和希 鈴木 寛人 山口 桃生 横山 智紀 鈴木 絵莉 塚口 雄太 坪井 絢香 成島 悠太 長吹 晴一郎 豊泉 樹一郎 石田 裕丈 井出 貴文 内田 貴啓 大滝 俊也 寺田 健一郎 時部 正和 長澤 孝真 藤山 みなみ 藤山 裕兒 山根 正敬	平成25(2013)年卒	石田 裕丈 井出 貴文 内田 貴啓 大滝 俊也 寺田 健一郎 時部 正和 長澤 孝真 藤山 みなみ 藤山 裕兒 山根 正敬	平成26(2014)年卒	渡邊 理香 井上 祐希江 上原 将士 加藤 彩香 外山 真衣 成田 雄大 船本 雅文 吉田 裕和 若宮 紀子 柏倉 康治 小山内 崇人 國安 健太 佐藤 晶彦 鈴木 美帆 鈴木 祐介 中田 裕之 古谷 孝理 宮崎 雄輔 横田 将史 中村 豪之 高橋 茉那 鶴田 聡志 並木 拓哉 福田 匡貴 加島 宗 大西 琢磨 阿部 瑞己 薄井 隼人 江崎 香奈子 大塚 和摩 片山 歩実 木村 直人 佐伯 棕子 高橋 航 田中 奈津美 トンジャシイン 中川 智 沼子 将大 橋本 優子 葉山 智拓 福井 芹菜 三上 靖代 山根 千佳 山本 裕和 米川 恵理 蛸野 大輝 片山 剛 青山 春菜 江間 千裕 酒徳 航平 佐々木 孝彰 杉本 澤彦 多良 勇輝 吉田 光伸 安部 友涼 石村 麻衣 伊藤 優太 猪又 健吾 岩崎 菜々美 時部 綾華 大西 あゆみ 荻原 亘汰 奥野 理菜 織井 亮匡	平成27(2015)年卒	柏倉 康治 小山内 崇人 國安 健太 佐藤 晶彦 鈴木 美帆 鈴木 祐介 中田 裕之 古谷 孝理 宮崎 雄輔 横田 将史 中村 豪之 高橋 茉那 鶴田 聡志 並木 拓哉 福田 匡貴 加島 宗 大西 琢磨 阿部 瑞己 薄井 隼人 江崎 香奈子 大塚 和摩 片山 歩実 木村 直人 佐伯 棕子 高橋 航 田中 奈津美 トンジャシイン 中川 智 沼子 将大 橋本 優子 葉山 智拓 福井 芹菜 三上 靖代 山根 千佳 山本 裕和 米川 恵理 蛸野 大輝 片山 剛 青山 春菜 江間 千裕 酒徳 航平 佐々木 孝彰 杉本 澤彦 多良 勇輝 吉田 光伸 安部 友涼 石村 麻衣 伊藤 優太 猪又 健吾 岩崎 菜々美 時部 綾華 大西 あゆみ 荻原 亘汰 奥野 理菜 織井 亮匡	平成28(2016)年卒	中村 豪之 高橋 茉那 鶴田 聡志 並木 拓哉 福田 匡貴 加島 宗 大西 琢磨 阿部 瑞己 薄井 隼人 江崎 香奈子 大塚 和摩 片山 歩実 木村 直人 佐伯 棕子 高橋 航 田中 奈津美 トンジャシイン 中川 智 沼子 将大 橋本 優子 葉山 智拓 福井 芹菜 三上 靖代 山根 千佳 山本 裕和 米川 恵理 蛸野 大輝 片山 剛 青山 春菜 江間 千裕 酒徳 航平 佐々木 孝彰 杉本 澤彦 多良 勇輝 吉田 光伸 安部 友涼 石村 麻衣 伊藤 優太 猪又 健吾 岩崎 菜々美 時部 綾華 大西 あゆみ 荻原 亘汰 奥野 理菜 織井 亮匡	平成29(2017)年卒	阿部 瑞己 薄井 隼人 江崎 香奈子 大塚 和摩 片山 歩実 木村 直人 佐伯 棕子 高橋 航 田中 奈津美 トンジャシイン 中川 智 沼子 将大 橋本 優子 葉山 智拓 福井 芹菜 三上 靖代 山根 千佳 山本 裕和 米川 恵理 蛸野 大輝 片山 剛 青山 春菜 江間 千裕 酒徳 航平 佐々木 孝彰 杉本 澤彦 多良 勇輝 吉田 光伸 安部 友涼 石村 麻衣 伊藤 優太 猪又 健吾 岩崎 菜々美 時部 綾華 大西 あゆみ 荻原 亘汰 奥野 理菜 織井 亮匡	平成30(2018)年卒	阿部 瑞己 薄井 隼人 江崎 香奈子 大塚 和摩 片山 歩実 木村 直人 佐伯 棕子 高橋 航 田中 奈津美 トンジャシイン 中川 智 沼子 将大 橋本 優子 葉山 智拓 福井 芹菜 三上 靖代 山根 千佳 山本 裕和 米川 恵理 蛸野 大輝 片山 剛 青山 春菜 江間 千裕 酒徳 航平 佐々木 孝彰 杉本 澤彦 多良 勇輝 吉田 光伸 安部 友涼 石村 麻衣 伊藤 優太 猪又 健吾 岩崎 菜々美 時部 綾華 大西 あゆみ 荻原 亘汰 奥野 理菜 織井 亮匡	平成31(2019)年卒	片山 剛 青山 春菜 江間 千裕 酒徳 航平 佐々木 孝彰 杉本 澤彦 多良 勇輝 吉田 光伸 安部 友涼 石村 麻衣 伊藤 優太 猪又 健吾 岩崎 菜々美 時部 綾華 大西 あゆみ 荻原 亘汰 奥野 理菜 織井 亮匡	令和2(2020)年卒	安部 友涼 石村 麻衣 伊藤 優太 猪又 健吾 岩崎 菜々美 時部 綾華 大西 あゆみ 荻原 亘汰 奥野 理菜 織井 亮匡	令和3(2021)年3月卒の皆さんの支払済の 会費は、令和3年度の会費に充当させていただきます。

令和2年度 会費納入者一覧 (敬称略)

終身：終身会費納入者 10年：10年会費納入者
(修士)：修士修了年 (博士)：博士修了年

昭和 20 (1945) 年卒	右近 洋英	松永 義明		渡辺 直則	杉山 葉子	丸山 博三
	平尾 定子	溝口 謙吾		昭和 39 (1964) 年卒	鈴木 義則	村松 鐸治
	三村 治子	山下 恒子		10 年	高橋 郁子	森下 隆子
昭和 21 (1946) 年卒	大坪 千恵子	山田 とし子	10 年	新 邦夫	田中 敏子	山上 寿子
	児玉 光子	吉田 桂子		有光 とし子	田辺 智弘	山田 幸子
昭和 23 (1948) 年卒	小林 猛夫	昭和 36 (1961) 年卒		飯塚 優規子	谷澤 康子	山本 武司
	赤堀 美代子	朝木 はる子		手塚 雅勝	手塚 雅勝	高山 修一
	奥田 政子	大塚 信子		犬伏 式生	中村 好志	終身
昭和 24 (1949) 年卒	谷口 年男	岡 鐵雄		犬伏 三千代	成田 愈尚	昭和 44 (1969) 年卒
	久保田 田鶴子	小堤 公子		岩本 浩代	糠谷 東雄	安藤 亮司
	崎山 邦子	金井 修躬		小沢 敬子	沼田 洋	岩城 節子
	米澤 宜子	河谷 浩子		開発 雅子	野田 弘子	植田 悦子
昭和 25 (1950) 年卒	中島 信子	木下 幸子		柿谷 芳宏	服部 徳子	浮島 美之
	安間 俊子	佐藤 美也子		角 重信	古木 昭夫	桐浴 静江
	川村 幸子	渋谷 けい子		味知 恵子	味知 恵子	佐藤 しづ子
	西村 トシエ	高木 操		佐野 勝	森田 俊夫	佐藤 正基
	武藤 幸子	田中 洋子		左納 通正	山崎 悦孝	杉山 恭子
	望月 摩利子	田中 正幸		鈴木 康夫	山中 矩子	鈴木 勝雄
	渡辺 喜久代	中川 豊子		高桑 幸子	渡邊 能子	武田 隆幸
昭和 26 (1951) 年卒	古川 卓	仲道 述夫		竹上 英男	昭和 42 (1967) 年卒	東郷 笑美子
	堀田 好	西野 章		竹野 精治	上西 明子	馬場 宏行
	栗山 理子	古田 尚平		内田 源治	内田 隆	伴 晴江
	小林 仁美	堀井 大治郎		田中 源治	内田 文代	藤井 真
	杉浦 昌子	堀永 純一		辻 邦郎	奥村 令子	宮武 忠司
昭和 28 (1953) 年卒	吉田 佳子	丸山 晃		豊田 満	小澤 久子	村上 実
	上塚 敬子	丸山 利依子		名倉 猛夫	小泉 听也	10 年
	細田 興子	水谷 義美		西澤 伸行	斉藤 紀恵	村松 郁延
	室伏 すみ子	山崎 雅江		林 英文	白橋 美智子	望月 笙子
昭和 29 (1954) 年卒	石和 誠	山下 敏夫		樋口 淑子	鈴木 和子	森本 正信
	瀧美 弘子	山本 擴		深沢 彰	鈴木 紳一	山本 栄子
	大西 安子	有紀 美枝		本田 貫十郎	鈴木 孝子	若尾 直司
	小野 郁夫	渡辺 亜沙子		三浦 勇二	芹沢 嘉子	昭和 45 (1970) 年卒
	杉本 敬一	石井 漱一		宮本 正紀	高田 トシ子	青木 興治
	瀨尾 弘子	神田 礼子		八鍬 恭子	高柳 法康	有本 博雄
	武野 喜夫	賀村 雅子		昭和 40 (1965) 年卒	竹下 邦雄	市尾 義昌
	寺井 和子	亀井 興		秋山 喜彦	田村 八宏	伊藤 徳雄
	西川 佳代	河村 信弘		足立 一彦	近村 房枝	稲葉 藤子
	平野 信三	伊藤 弘子		池田 正章	土屋 久美子	内神 啓子
	平林 和子	桑原 伊玖子		石原 廣男	長島 紀子	浦野 治明
	淵野 恒雄	小西 一宏		井手吉 範久	糠谷 ミツル	小楠 和彦
	正木 ミツ工	近藤 静男		岩本 喜久子	長谷川 進彦	折田 和恵
	増田 令子	境澤 貞夫		大塚 坦造	船山 和彦	北脇 康子
	山下 友子	菅田 庸子		角 淑子	望月 知嘉子	金月 一夫
昭和 32 (1957) 年卒	溝口 しづ	白井 千恵子		木苗 直秀	山本 敏博	10 年
	青山 健一	鈴木 智彦		河野 悦子	山本 正枝	熊谷 直人
	秋山 矩子	鈴木 光子		五島 綾子	若宮 忠弘	久米澤 正樹
	泉 安子	大長 美穂子		小西 みゆき	鷺巢 昭弘	桑山 雅枝
	稲名 一枝	田中 恒夫		齋下 光宏	鷺巢 幸子	後藤 守男
	梅村 隆久	袴田 和子		佐合 武	櫻田 武明	小林 政幸
	太田 斐子	松岡 千恵子		志村 洋子	昭和 43 (1968) 年卒	渡辺 幸夫
	開発 邦男	山本 昭野		鈴木 一市	浅岡 公江	佐野 満昭
	河西 健	有田 政彦		高橋 圭子	雨宮 敏子	柴田 揚子
	酒見 圭子	市中 洋子		谷澤 久之	安間 勝男	清家 功
	杉浦 暢	宇都 宗長		手塚 勇	岩崎 健一	高山 雅子
	須崎 守康	宇都 仁子		中 寿美	植松 正吾	富坂 修
	辰己 好美	遠藤 伸江		中川 いく子	宇都宮 岩生	仲谷 博明
	中谷 貴美子	小川 高子		長沢 淑子	大谷 淑郎	二宮 俊隆
	野村 由紀子	奥村 太一		中島 欣吾	小笠原 純子	野田 幸男
	林 貞子	小栗 信彦		永野 隆夫	梶原 和恵	法月 正善
	平野 昌子	尾崎 克子		藤井 加藤 喬一	加藤 喬一	橋本 茂
	福岡 妙子	角田 藤子		川口 彰	川口 彰	廣田 勇夫
	増井 幸子	金子 治郎		北原 功久	北原 功久	細田 康彦
	増井 千恵子	久保田 光秋		北村 久代	木俣 六司	堀内 淳司
	増田 恵美子	小林 弘子		向後 勝成	向後 勝成	増田 義典
	松岡 淑子	小林 富二男		齋藤 正子	佐藤 美代子	望月 和子
	丸山 晶	杉山 豊美		佐藤 昭二	和田 和	望月 利郎
	三谷 倫一	鈴木 澄雄		鈴木 登志子	昭和 46 (1971) 年卒	山崎 正敏
	森谷 甫美	鈴木 千枝		鈴木 ふみ子	青木 行雄	山下 健二郎
	山内 丈	鈴木 正子		高橋 克俊	安倍 恵子	横山 さと子
	山村 美智彦	寺田 姉生		谷口 邦子	10 年	和田 澄子
	依光 悦子	百々 紗世子		辻 静子	10 年	伊東 俊雄
	渡辺 規子	青木 富佐		中 公子	入江 洋子	入江 俊夫
昭和 33 (1958) 年卒	青木 仁	鳥居 暁		永野 博正	永野 博正	小川 光子
	青山 仁	中嶋 いち子		仁科 美代子	仁科 美代子	10 年
	縣 貴江	鍋谷 勤		野沢 千鶴子	野沢 千鶴子	小本 曾 俊夫
	石田 佳子	林 正康		深沢 伸之	深沢 伸之	神谷 庸
	伊庭 治子	星 由利子		藤井 武教	藤井 武教	木苗 恵子
				堀川 武	堀川 武	久保田 美恵子
				本間 文夫	本間 文夫	熊谷 猛
				前田 文子	前田 文子	熊谷 房子
						近藤 隆

県大卒業生も多数活躍中!

静岡で就職なら メディスン

静岡市内に薬局 6 店舗
健康食品・OTC 専門店 1 店舗展開

静岡県立大学薬学部連携薬局

株式会社 静岡メディスン

静岡市駿河区宮竹 1 丁目 4 番 5 号
TEL : 054-237-5316
E-mail : soumu@e-medicine.co.jp



わかくさ薬局グループ

「良き仕事は良き社員から、
良き社員は良き会社から」

これを信念に、
わかくさ薬局グループでは社員教育に力を注いでいます。

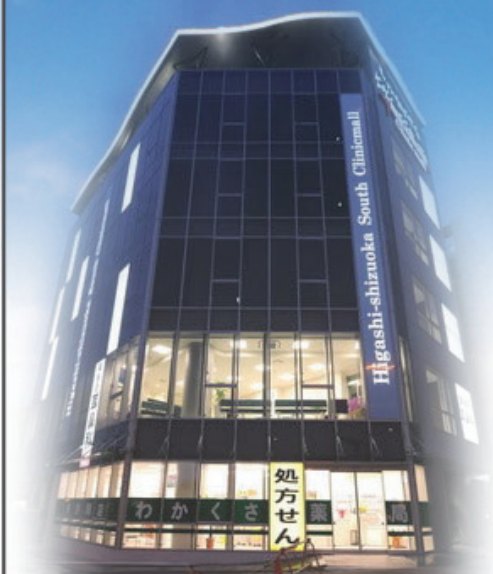
それは職場だけにとどまらず、経験を活かし、己を高め、
自己研鑽が楽しくなるような場の提供をしています。

いつでも、高きを仰ぐ気持ちを忘れずに。
日々を過ごすことに誇りを持ち、実践できるように。

わかくさ薬局グループ
代表 高橋 千恵子



つづきはWebで。
<http://www.stcy.co.jp>



未来の医療を築く研究と一緒に

静岡県立静岡がんセンターでは、
臨床研究に従事するDM、CRCを募集しています



CRC

臨床研究コーディネーター

＜主な業務内容＞

臨床研究の運営支援業務

- ・ 被験者のスケジュール管理
- ・ 安全性情報の作成・報告
- ・ 臨床研究の計画書等各種文書の作成
- ・ 被験者登録
- ・ CRFの作成
- ・ モニタリング・監査対応
- ・ スタッフ教育



CRC

DM

データマネージャー

＜主な業務内容＞

臨床研究のデータマネジメント業務

- ・ データベース構築・管理
- ・ EDC構築・管理
- ・ データ入力・修正
- ・ データクリーニング
- ・ データ集計
- ・ システムヘルプデスク対応
- ・ スタッフ教育



DM



詳しくはこちらから

【CRC】https://www.scchr.jp/careers/full_time/crc.html

【D M】https://www.scchr.jp/careers/full_time/clinicalresearch_dm.html



静岡県立
静岡がんセンター